

『続高僧伝』 研究序説——刊本大藏経本を中心として

鶴見大学仏教文化研究所 池 麗梅

はじめに

『続高僧伝』は、中国南山律宗の開祖としても知られる唐代の仏教史家道宣（五九六～六六七年）が、六世紀初頭から七世紀中頃までに活躍した高僧たちの事跡を集めて著した史伝である。統一王朝の都長安という地域に具わった資料蒐集・情報交換の利便性を存分に活かすと共に、現地調査を晩年まで続けて見聞を更に広げ金石資料の収集や検証も行った。この努力が実り、『続高僧伝』は、梁・宋・明に成立した歴代高僧伝と比肩するのみならず、特に資料の豊富さと正確さにおいては抜群に高い評価を得ており、南北朝後期から隋唐代までの中国仏教史を研究する上で必要不可欠な文献となっている。しかし、収録資料が膨大なうえ多岐にわたっていることもあり、資料的価値が認められ、様々な研究分野において引用・援用される一方で、『続高僧伝』そのものを文献学的研究を踏まえながら歴史的・思想的に解明しようとする試みは、その基礎すら定まっていないのが現状である。

このような『続高僧伝』そのものを対象とする研究を困難にさせてきた原因の一つは、その成立にまつわる複雑かつ謎めいた事情にある。すなわち、道宣の序文によれば、同書は南朝梁代の慧皎『高僧伝』（仏教初伝以来、五一九年までの高僧の伝記）を継ぎ、唐貞観十九年（六四五）までの一四四年間に活躍した高僧について、正伝だけでも三四〇人分を収録しているという^①。しかし、現行諸本を見る限り、『続高僧伝』が収録する伝記の実数は、著者本人

が序文で告知した総数よりもかなり増えており、また、同書が完成したとされる六四五年以後の記事も存在し、あまつさえ道宣死後のできごとにまで言及されているのである。⁽²⁾ こうした種々の齟齬の存在から、先学は『統高僧伝』が現行本の形態に至るまでに数段階の増補・編纂が行われた、と想定した。例えば、前川隆司氏らは道宣撰『後集統高僧伝』(佚書)という書物に着目し、その内容を後世の人が『統高僧伝』に合縁することによって現行本の形態が生まれた、と推定した。⁽³⁾

後に、京都興聖寺の一切経から『統高僧伝』の古写本が見出され、刊本諸本より成立段階が古いものであることが判明した。⁽⁴⁾ この発見によって『統高僧伝』研究は新段階に到達し、古写本そのものは実見していなかったものの、伊吹敦氏はそれまでの先行研究を批判的に摂取しつつ、『統高僧伝』の写本・刊本・音義書・綱目書などの諸資料に基づいて、同書の増補過程の解明に努めた。⁽⁵⁾ その後、興聖寺本の内容が一部ながらアクセス可能になってから研究は更なる進展を見せ始めるが、その代表的な成果として、伊吹敦氏による習禅篇を中心とする研究のほか、藤善真澄氏が、道宣伝の総合的研究の一環として、『玄奘伝』の成立など様々な角度から『統高僧伝』の成立事情の解明に迫った研究が挙げられる。⁽⁷⁾ 近年、日本の奈良・平安・鎌倉時代に書写された一切経をめぐる網羅的な調査研究の展開につれて、興聖寺本以外の古写経本『統高僧伝』の存在と内容も次第に明らかになり、興聖寺本に加え、大阪金剛寺と名古屋七寺で確認された二種のテキストを援用して「玄奘伝」や「慧遠伝」などに焦点を当てた詳細かつ最新の研究が斎藤達也氏によってなされた。⁽⁸⁾

『統高僧伝』研究の現状では、数段階にわたって行われたと想定される増補・編纂がそれぞれ、いつ、誰の手によるものなのかは、いまだ定説に至らないが、そうした増補が七世紀半ばから十二世紀初頭まで断続的に行われたことは、諸伝本間に見られる大幅な内容の増減によって裏付けられている。それらの諸伝本は、書物の形態およびテキストの系譜・流布の地域などに基づいて、大きくは中国・朝鮮で成立した刊本大蔵経系統本と日本古写経系統本とに分けられる。後者の写本系統本については別稿で取り上げるため、本稿は刊本大蔵経本とその系譜について検討するものである。現在、最も広く知られている刊本大蔵経本『統高僧伝』は、『大正新脩大蔵経』(以下、『大正蔵』と略する)

第五十冊に収められたテキストであるが、これは高麗再雕藏本を底本とし、増上寺所蔵の宋思溪藏本・元普寧藏本・明嘉興藏本と宮内庁書陵部所蔵の福州版本（「宮本」）等を校本にして校異したものである。先行研究はこの大正藏本を基本的なテキストとして進められ、ここでは高麗本『続高僧伝』を基準とし、他の諸資料によって高麗本以前の形態を推測していくと同時に、高麗本とそれ以後の諸本との相違に注目して改変の経過を実証的に跡付けるとい研究方法論が確立され、『続高僧伝』の増補過程に関する討究が進められたのである⁹⁾。

一方、本論文は、大正藏本の本文や校注だけを頼りに『続高僧伝』諸本の相違を検討するのではなく、あくまで現存伝本の実物あるいは影印・マイクロフィルム紙焼きなどの実見を通して資料蒐集を行い、調査研究の環境を整備した上で、『続高僧伝』に関わる認識を総体的に深めようとする試みの一つである。調査過程で出会った種々の資料の一部はこれまで広くは知られてこなかったものであり、それらを紹介すると共に、すでに知られ、また活用されてきた資料についても、従来とはやや違う角度からの研究方法を提案したいと考えている。従来の研究は、写本・刊本・音義書・綱目書などの諸資料を網羅的に取扱うことによって、長期にわたって行われた増補の過程を総括的に示すことに一定の成果を収めたと言えるが、しかし、十世紀以降の刊本大藏経系統本に限定して言えば、『続高僧伝』の相違箇所注目して諸本の相互関係を検討する際には、そのテキストを収める大藏経の成立史も視野に入れて慎重に進める必要がある。そこで本論文では、『続高僧伝』の増補過程をめぐる様々な問題を、諸刊本大藏経の成立史という大きな流れの中において捉えなおす、という方法を提案し、また実際に試みてみたいのである。

一、唐代の経録に現れる『続高僧伝』の関連記事

『続高僧伝』の現存諸伝本は、後述するように、いずれも十世紀以降のテキストであり、それ以前のすなわち唐代における流布状況については、同じ唐代に撰述された仏典音義書や経録（仏教典籍目録）を手がかりに推測するしか

ない。そこで、本節では、唐代成立の経録に現れる『続高僧伝』の関連記述に焦点を当てながら考察を進めたい。『続高僧伝』がはじめて経録に登場してくるのは、道宣自身が麟徳元年（六六四）正月に完成させた『大唐内典録』^⑩においてである。同録の卷十には、「皇朝終南山沙門釈道宣撰伝録等」として、左記の①から⑨までの九種百十一巻の著作が挙げられている。^⑪

- ① 釈門懺悔儀一部三卷
- ② 釈迦方誌一部二卷
- ③ 古今仏道論衡一部三卷
- ④ 大唐内典録一部十卷
- ⑤ 続高僧伝一部三十卷
- ⑥ 後集続高僧伝十卷
- ⑦ 広弘明集一部三十卷
- ⑧ 東夏三宝感通記一部三卷
- ⑨ 刪補律相雜儀合二十卷

この中では、下線を引いた「続高僧伝一部三十卷」および「後集続高僧伝十卷」という記載がとりわけ注目に値する。なぜなら、これに基づいて、『続高僧伝』はもともと三十巻からなる書物であること、またその続編と考えられる『後集続高僧伝』（十巻）が麟徳元年（六六四）までに完成していたことが判明するからである。ところが、『後集続高僧伝』が実在の書物として言及されるのは、『大唐内典録』が最初で最後であり、開元十八年（七三〇）頃に成立した智昇の『開元釈教録』（以下、『開元録』と略称する）にはその名はすでに見あたらなくなり、貞元十六年（八〇〇）成立の『貞元新定釈教目録』（以下、『貞元録』と略称する）に至っては「内典録中更有『後続高僧伝』十巻、尋本未獲、故闕」と記し、もはや佚書として扱っているのである。『続高僧伝』の続編という重要な地位を占めたに違いない『後

集続高僧伝』が成立してから百数十年のうちに佚書となってしまった要因はいくつか考えられるが、その一つとして、本書の内容がかなり早い時期から『続高僧伝』の中へと断続的に移入されるにつれて、独立した書物としての存在感と必要性を失っていった可能性が指摘できよう。

次に、智昇が紀元七三〇年頃に編纂した『開元録』の卷十三「有訳有本録」では、その「聖賢伝記録」におよそ「四十四部三百六十八卷四十二帙」に及ぶ「此方撰述集伝」が挙げられている。そこに見える『続高僧伝』の関連記載は左記のようなものである。

続高僧伝三十卷

大唐西明寺沙門釈道宣撰

出内典録
新編大蔵

上一集三十卷分為四帙

第一第二各八
第三第四各七

(12)

この記載によって、八世紀頃の唐で流布していた『続高僧伝』もやはり三十巻構成のものであり、それが四帙に分けて保存されていたことがわかる。更に注目すべきは、『大唐内典録』では「皇朝終南山沙門釈道宣撰」とされていた撰号が、「大唐西明寺沙門釈道宣撰」となっていることである。

もう一つ「有訳有本録」よりやや簡略な記載が、同書の卷二十「入蔵録下」に見える。ただ、高麗蔵本所収の『開元録』のテキストと宋版以降に収められるテキストとは、特にその「入蔵録」（『開元録』卷十九く巻二十）において相違が甚だしいため、大正蔵は、やむを得ずであろう、底本である高麗本に従って同書を全巻掲載した後、「入蔵録」だけは明版を底本に宋元版で校異したものを重ねて掲出（「重出」）している。『大正蔵』所収のこれら二つの「入蔵録」に含まれている『続高僧伝』の関連記載は左記の通りである。

【高麗本】

続高僧伝三十巻七百三十紙

上一集三十巻分爲四帙 第一第二各八
第三第四各七 (13)

【宋元明版】

続高僧伝三十巻 十八頁三 唐京兆西明寺沙門釈道宣撰

上一集三十巻分爲四帙 第一第二各八巻
第三第四各七巻 (14)

上掲二種の記載には明確な違いが二点ある。一つは紙数にして百に及ぶ分量の相違、もう一つは宋版では著者の撰号が加えられているところである。この違いが生じた理由は不明だが、後述するように、『開元録』より七十年ほど遅れて成立した『貞元録』の「入蔵録」には上掲の高麗本の記載と全く同様の書誌情報が見えるのである。つまり宋版以降の『開元録』「入蔵録」（以下、「開元入蔵録」と略称する）は加筆されている可能性が濃厚であり、その記載に基づいて八世紀前半における『続高僧伝』の状態を判断すべきでないと考えられるのである。

もう一つ『続高僧伝』に関連し疑問視される記述が、『開元釈教録略出』（以下、『略出』と略称する）という文献の中に含まれている。同書は前述の「開元入蔵録」の抄録にあたる性質をもつ文献であるため、巻頭に記された著者名を鵜呑みにして、やはり智昇の著述と見なされていた。同書は高麗蔵など開宝蔵系統の大蔵経に含まれていないため、大正蔵は明版を底本として宋元版本に拠って校異している。その巻四に見える『続高僧伝』の関連箇所は、宋版本では次のように見える。

続高僧伝三十一巻 出典内
録 大唐西明寺沙門釈道宣撰

上件三十一巻分爲四帙計七百九十二紙

内左達承 (15)

この書誌情報は、上掲の高麗本「開元入藏録」の記載と比べると、紙数の増加（六十二紙）・著者撰号の明記という二点において、宋版以降の「入藏録」に現れる変更と同様の傾向が見られる。更に、総巻数の変化や「内」「左」「達」「承」という千字文帙号の出現は、一種の革新とも言うべき変更である。

『続高僧伝』の研究史において、同書の増広は『後集続高僧伝』との合糅によるものという説を最初に提唱したのは、同書研究の開拓者の一人である前川隆司氏（前川「一九六〇」）であった。同氏によって示された『続高僧伝』増広の経過は、全体的な流れとしては正しいと認められている。しかし、三十一巻本も含め、広略の差が大きい三種の異本が唐代に存在していたとする同氏の結論には議論の余地が残っている。その議論は、伊吹敦「一九九〇」で指摘されたように、『続高僧伝』に関する、高麗本「開元入藏録」、宋版以降の「開元入藏録」、そして『略出』に見える関連記述をすべて智昇の手によるものとする前川氏の理解をめぐるものである。特に三十一巻本が初出する『略出』について、伊吹氏は次のように述べている。

『略出』の成立については、既に小野玄妙氏や、鈴木宗忠氏に論及がある如く、古くより智昇撰は疑問視されているのである。鈴木氏は、『略出』の函号が福州版になって改められたものであることを指摘されたが、私も、『開元録』と『略出』との間で巻数の異なっている経論について、福州版系の大藏経に於ける巻数を調べてみたが、その結果、いくつかの例外を除いて略ぼ完全に『略出』と一致していることを確認できた。字号や巻数が既にそうである以上、『略出』の記載を福州版大藏経の編纂以前に遡らせることは無理であり、従って、『略出』を根拠に三十一巻本が唐代に既に存在したと考えることはできない。（伊吹敦「一九九〇」、六十頁）

同様に『略出』の智昇撰述説に疑いの目を向けたのは漢文大藏經の専門家、方広錫氏である。同氏は、経録の記載、「開元入藏録」と「開元入藏録」との関連性、更には、『略出』と「開元入藏録」との間に見られる、記載する典籍の総部数・巻数（典籍総巻数・個別の典籍の巻数）・各典籍の紙数の相違に基づいて、『略出』を智昇の撰述と見なすべきではないことを論証した。更に『略出』の成立については、唐代会昌廃仏後の中国各地では諸寺院はそれぞれが所蔵する大藏經を点検・管理する際に「開元入藏録」を基準としたが、その記載内容が簡略なため、しばしば「有訳有本録」を併用しなければならず、不便であった。そこで、「入藏録」を基本とし、必要に応じて「有訳有本録」に基づく書誌情報や千字文帙号も加えて、経藏の管理という実用に適した台帳として作り出されたのが『略出』の原型であった。原型段階の『略出』の記載はすべて『開元録』の内容に従っていたと思われるが、しかし使用頻度が増えるにつれて、各地各寺院の藏經の実態を反映し、具体的な部数・巻数・紙数が異なる多様なバリエーションが生まれるに至ったことは、『略出』の敦煌写本(S.5594)や宋版本などの存在によって裏づけられる。敦煌写本(S.5594)は敦煌寺院の大藏經の構成を反映し、福州版以降に入藏した現行本『略出』は江南地域の大藏經の実態を現わすものと考えられている⁽¹⁶⁾。

現行本『略出』に見える『統高僧伝』の記載(前掲文)に関して言えば、「三十一巻」という巻数や「内」「左」「達」「承」の千字文帙号は、確かに後述の開宝藏系統本『統高僧伝』に一貫して見える「三十巻」の調卷法や「左」「達」「承」「明」という帙号とは相違する一方で、福州版本をはじめとする江南大藏經系統本の実態とは完全に一致しているのである。この事実を『略出』の成立をめぐる問題と併せて考えれば、現行本『略出』の記載に基づいて三十一巻本『統高僧伝』の成立は唐代に遡ると見るべきではなく、現行本『略出』の記載は福州版本などの江南大藏經本に基づいて改められたものと考ええるべきではなからうか。

最後に、『統高僧伝』は八〇〇年頃に成立した『貞元録』にも登録されている。同録(卷三十)所収の「入藏録」に見える「統高僧伝三十巻／七百三千紙／上一集三十巻 分爲四帙 第一第二各八 下二帙各七⁽¹⁷⁾」という記載事項に

基ついて言えば、『統高僧伝』は「開元入藏録」（高麗本）が記録する七十年前の形態を、ほとんど変えずに九世紀初頭まで保持していたと判断できる。従つて、『統高僧伝』の増補が実際に先行研究が主張するように『後集統高僧伝』の内容を情報源として行われたとすれば、その増補作業は、『統高僧伝』の初稿が完成した六四五年から『開元釈教録』の成立する七三〇年までの間、または『貞元録』が成立した八〇〇年以後に行われたことになる。

二、諸刊本大藏経系統における『統高僧伝』

先に述べたように、『統高僧伝』の現存諸本は、書物の形態・テキストの系譜および流布した地域などに基づいて、大きくは中国・朝鮮刊本大藏経系統本と日本古写経系統本とに分けられる。本稿が主題とするのは刊本大藏経系統に属する代表的なテキストであるが、竺沙雅章氏による宋・元時代の刊本大藏経の三分類では、⁽¹⁸⁾開宝藏とその覆刻にあたる高麗藏（初雕・再雕）・金藏は第一類、契丹藏をはじめとする大藏経は第二類、江南諸地域（福州・湖州・蘇州・杭州）で雕造された諸藏は第三類とされる。⁽¹⁹⁾一方、中国の大藏経研究者の間では、成立あるいは流布した地域によつて大藏経を「中原系」・「北方系」・「江南系」と分類するのが一般的であるが、⁽²⁰⁾内実としてはそれぞれ、竺沙氏の第一類・第二類・第三類に対応するものと考えてよい。このうち、第二類の契丹藏など北方系統に属する『統高僧伝』テキストは現存していないため、その概況は、主に北方系統の写本大藏経に基づいて成立した音義書『随函録』（五代後晋の沙門可洪撰。高麗再雕藏本には『新集藏経音義随函録』（『高麗大藏経』第三十四～三十五冊）と題される三十卷本が収録されている。本稿では、以下、『随函録』と略称する）によつて推測するほか手だてがない。また、第一類の開宝藏系統本に関わる考察は、やはりすでに失われた開宝藏そのものではなく、それと同様に中原系統に分類されている高麗藏本および金藏本などを根本資料として展開するものである。最後に、江南諸藏に含まれる『統高僧伝』に関しては、すべての現存伝本ではなく、その中でも成立年代の古い福州版と湖州版だけに注目して考察を進めてい

くことを、あらかじめお断りしておかねばならない。

このほか、時代はかなり下るが、明代に刊刻された大藏経にも『続高僧伝』が収められているが、現在、影印版などの形で入手しやすいものとして以下の三つが挙げられる。一つは、明建文元年（一三九九）から三年（一四〇一）の間に完成した初刻南蔵⁽²¹⁾、次に、明成祖永楽十七年（一四一九）から英宗正統五年（一四四〇）の間に作られた「正蔵」と万曆七年から十一年（一五七九〜一五八三）にかけて完成した「続蔵」とを合わせた永楽北蔵⁽²⁴⁾、三つ目は、明万曆年間から清康熙年間（一五八九年頃〜一七二二年頃）にかけて完成し、『大正蔵』の校本（増上寺報恩蔵「明本」）ともなった嘉興蔵⁽²⁵⁾のテキストである。これらの諸蔵に含まれる『続高僧伝』テキストは、特に北蔵以降、それまでの三十一巻の調巻を更に四十巻に仕立て直し、更に一部の伝記内容の順序を調整するなどして全体の整合性を図ろうとしたところに特色がある。しかし『続高僧伝』の増広過程に関して言えば、そのダイナミックな変化がすでに沈静化した後に出来上がったテキストであるため、本稿の検討対象にはならないのである。

（一）開宝蔵系統の『続高僧伝』について

開宝蔵は、北宋太祖の勅命を受け、開宝四年（九七一）に開板された中国史上初の木版大藏経であり、その主幹となるのが、開宝四年から太平興国八年（九八三）にかけて益州（現在の四川省成都あたり）で雕造された初雕本である。初雕本の版木は完成した年に都の開封へ運送され、太平興国寺に設置された伝法院に納められ、熙寧四年（一〇七二）に顕聖寺聖寿禅院に移送されるまで印行の用に供された。⁽²⁷⁾その後、開宝蔵はおよそ三回にわたり増補され、真宗咸平二年（九九九）までに北宋新訳経典三十帙と『開元録』未収の典籍二十七帙、宋神宗熙寧六年（一〇七三）に北宋新訳経典と中国僧俗の著述、そして宋徽宗大觀二年（一一〇八）までには最新訳経典と天台宗・華嚴宗・法相宗諸師の著述を、それぞれ追加して雕造されたと推測されている。⁽²⁸⁾

開宝蔵の全体的構成を伝える資料として、北宋惟白『大藏経綱目指要録』（以下『指要録』と略する）が特に信頼に値する。同書は、惟白が婺州（現在の浙江省金華）金華山智者禪寺の大藏経に基づき、崇寧三年（一一〇四）二月三日に完成させた大藏経綱目提要である。同書卷八の記述によれば、智者禪寺大藏経は全体として、『開元録』に準じて配列される「五千四十余巻、四百八十帙」に加え、「其余随蔵添賜経伝三十帙、未入蔵経二十七帙」の印経官印板本によつて構成されるものだが、実際に『指要録』が取り扱う対象としたのは前者の「四百八十函」に納められた「五千余巻」である。そもそも十二世紀初頭の時点で「印経官印板」といえば開宝蔵以外には考えられず、実際に開宝蔵の現存諸巻に見える千字文帙号が『指要録』のそれと完全に一致したことから、智者禪寺大藏経は開宝蔵であったことが判明している²⁹ので、同書の記録によつて開宝蔵初雕本の全容は明らかになるのである。

現在では、併せて十二巻の印本³⁰を除き、ほとんど逸失したため、開宝蔵の実態は現存諸巻および同じ第一類系統に属する高麗蔵・金蔵に基づいて推測されているに過ぎない。なお、この刊本系統本にしか見出せない形態上の特徴として、一版二十三行、一行十四字という版式が挙げられる。この版式は、従来の唐代写本大藏経に用いられた一紙二十八行、一行十七字という書写規格、あるいは第三類刊本系統の江南諸蔵に共通してみえる一版三十―三十六行、一行十七字の版式とは明らかに違つている。従つてこれらの版式の相違は、刊本大藏経を分類するための指標の一つになつており、また日本古写経本が採用した底本を見極める際の重要な判断基準ともなつている。版式も含めた様々な共通点から、高麗蔵と金蔵は、特に「開元入蔵録」に依拠して収録された主幹部分の四百八十帙に関しては、開宝蔵の忠実な覆刻版であると一般に認められている。

第一類刊本系統の諸蔵に含まれる『統高僧伝』の現存伝本は、高麗初雕蔵本・高麗再雕蔵本・趙城金蔵本の三種類であり、いずれも三十巻本で、千字文帙号は「左・「達」・「承」・「明」、数字に置き換えれば第四六九から第四七二までの四帙にわたつて収められている。その中で唯一、中国で雕造されたのは、三つ目の金蔵である。金蔵そのもの

は金熙宗天眷二年（一一三九）頃から金世宗大定十三年（一一七三）頃までの間に刊刻された大藏経であるが、現在まで実際に伝わっているのは「趙城金藏」とも呼ばれる元世祖中統年間（一二六〇～一二六三）頃に印造された趙城広勝寺本である。⁽³¹⁾ 趙城金藏本『続高僧伝』の影印は『中華大藏経（漢文部分）』（中華大藏経編輯局（整理）、中華書局、二〇〇五年、第六十一冊）と『趙城金藏』（北京図書館出版社、二〇〇八年、第九十二～九十三冊）に収められているが、全三十巻のうち、左記の二十巻分が現存している。

第二巻・第三巻

第六巻～第十巻

第十四巻

第十六巻・第十七巻

第十九巻～第二十六巻

第二十九巻・第三十巻

一方、高麗における漢文大藏経の雕造史は、契丹軍の侵入から国を守るために発願され、顕宗二年（一一〇一一）から同二十年（一一二九）にかけて開板された大藏経をその濫觴とする。この、まさに国防戦略の一環とも言うべき国家的事業を遂行しようという発想とその実現を可能にする客観的な条件を提供してくれたのが、北宋から数度にわたって請来された勅版大藏経の開宝藏だったと考えられる。⁽³⁴⁾ 『宋史』巻四八七「外国三」には、宋太宗端拱二年（九八九）、淳化二年（九九一）、宋真宗天禧三年（一一〇一九）と三度にわたって、大藏経が高麗国の使者に下賜されたことが記録されている。⁽³⁵⁾ この高麗顕宗朝に完成された大藏経は、いわば高麗初雕藏の初刻にあたるもので、その底本として使用されたのは太平興国八年（九八三）までに雕造された開宝藏初雕本（『開元録』に基づく四百八十帙・五千四十八巻）であったと考えられる。更に、『高麗史』巻九と『統資治通鑑長編』巻三六二の記載によれば、高麗文宗三十七

年（一〇八三）、宣宗二年（一〇八五）の二回にわたり、北宋から大藏経が新たに請来されている。⁽³⁶⁾この時にもたらされた開宝藏は、初雕本のみならず咸平年間や熙寧年間に統刻された分もすべて網羅した最新版だったと考えられる。これらの大藏経の請来を受けて、文宗朝から宣宗四年（一〇八七）にかけて高麗初雕藏の統刻の雕造が進められていたのである。この時点で、高麗初雕藏という一群の經典集成の中には、顯宗朝の初刻部分（『開元録』記載分の五千四十八卷）と、文宗朝から宣宗朝にかけて完成した統刻部分が含まれており、その全体の規模は、義天「寄日本国諸法師求集教藏疏」⁽³⁷⁾（一〇八六年頃成立）に見える『開元釈教録』智昇所撰、『貞元統開元釈教録』円照所撰兩本所収経律論等、洎大宋新翻経論、総計六千来卷、並已雕鏤施行訖」という記述から判明している。この総数は熙寧年間頃の開宝藏のそれ（初雕と二回の増補分を併せて六四八二卷と推定される）とおおむね一致するものと考えられる。

従来、高麗初雕藏の実態は知られてこなかった。ところが、近年、韓国の湖林博物館や誠庵古書博物館等として日本の南禅寺に所蔵される高麗初雕藏本に対する調査研究が進む中で、その構成や内容が次第に判明してきたのである。⁽³⁸⁾『続高僧伝』に即して言えば、全三十卷のうち、南禅寺所蔵の高麗初雕藏本の中に左記の十八卷分の現存が確認されている。⁽³⁹⁾

第一卷・第二卷

第四卷～第七卷

第十二卷

第十六卷・第十七卷

第十九卷・第二十卷

第二十三卷～第二十七卷

第二十九卷・第三十卷

先にも述べたように、『続高僧伝』は『開元録』に記載される入藏典籍であるため、刊本大藏経であればその種類を

問わずいずれも初雕部分（四八〇帙分）に収められている。したがって、『統高僧伝』が一〇二九年に完成した高麗初雕蔵の初刻にも含まれていたことは確実と考えられ、初刻時にできた版木が高麗初雕蔵の続刻が行われた十一世紀末頃に改変されたかどうかは断定できないが、南禅寺所蔵の現存諸巻の現状に基づいて言えば、仮に改変が加えられたとしても、それは個別の文字に関わる程度の最小限度のものであったと判断できるのである。

高麗初雕蔵の版木は国家を鎮護する重宝として八公山符仁寺に奉納されていたが、高宗十九年（一二三二）に高麗に侵入してきたモンゴル軍によって焼毀されてしまう。このような国難のもと、入寇撃退と国家安泰の願いをこめて遂行されたのが、高宗二十三年（一二三六）から三十八年（一二五二）にかけて進められた高麗大蔵経の再雕という国家事業であった。早くも一二三六年に（本司）大蔵都監を江華島に設立して版下の書写や校勘が始まり、その翌年（一二三七）には「大蔵経刻板君臣祈告文」によって雕造事業の開始が宣告された。更に、高宗三十年（一二四三）、南海にも「分司大蔵都監」を設立して、雕造事業を分担させた。⁽⁴⁰⁾ そのため、現存の高麗再雕蔵本（全六五六〇巻）⁽⁴¹⁾ には、「大蔵都監」（一二三七～一二五一年）の刊記をもつもののほかに、「分司大蔵都監」（一二四三年～一二四七年）の刊記をもつもの（合計五二九巻）も含まれている。⁽⁴²⁾ 高麗再雕蔵の底本についてはいまだ定説に至っていないが、一説として、原則的には開宝蔵を底本とし、高麗初雕蔵本および契丹蔵本に拠って校勘修訂したが、開宝蔵に収録されていないか、その所収本に重大な欠陥があると判断された場合は、初雕蔵本あるいは契丹蔵本を底本として採用した場合もあつたとされている。⁽⁴³⁾

高麗再雕蔵本『統高僧伝』は三十巻構成のもので、その中、巻五と巻六の末尾に「癸卯歳高麗国大蔵都監奉勅雕造」という刊記が見えるが、ほかの二十八巻はすべて「癸卯歳高麗国分司大蔵都監奉勅雕造」という刊記がある。したがって、全巻とも一二四三年に雕造されたが、巻五と巻六は本司大蔵都監で、ほかはいずれも南海の分司大蔵都監で雕造されたことがわかる。高麗再雕蔵本の影印版は現在『高麗大蔵経』第三十二冊⁽⁴⁴⁾に、また一部は『中華大蔵経』第六十一冊にも収められている。その内容を前述の金蔵本と比べると、巻八の「慧遠伝」に見えるような明確な相違も

部分的には確認されるものの、全体としてはほぼ同一の内容と言つてよいであろう。ただし、高麗再雕蔵本の中には、金蔵本とは一致しているが、高麗初雕蔵本とは明らかに相違する部分も随所に見られるのは興味深いところである。

(二) 北方系統大藏経本の『続高僧伝』について

第二类あるいは北方系大藏経の代表格にあたるのは、契丹蔵（丹蔵・遼蔵ともいう）である。これは、二百年間（一〇一二年）より道宗咸雍四年（一〇六八）頃までに雕造された全蔵五七九帙の規模をもつ官版大藏経である。⁽⁴⁵⁾契丹蔵は、中国山西省応県仏宮寺釈迦塔仏像の胎内から発見された十二卷（うち一卷は復刻本）や河北省豊潤県天宮寺塔で発見された十一卷の小字版印本等が現存するほか、ほとんど逸失している。⁽⁴⁶⁾ただ、契丹蔵は現在の北京市房山区にある房山雲居寺に残る遼・金時代の石経の底本となり、また高麗再雕蔵本の校本（一部の経典では底本）ともなったため、これらの諸本と現存印本に基づいて、その実態は部分的ながらも知られてはいる。特に、現存伝本の形態および所収経典の巻数・帙号から浮かび上がってくる事実として、契丹蔵は従来の唐代写経の標準規格を継承して一版二十七〜二十八行、一行十七字の版式を採用し、また全五七九帙中、前の四八〇帙に収められる諸経の巻数および帙順の配列は、開宝蔵よりも厳密に「開元入蔵録」に従っていることが判明した。一説には、房山石経を雕刻するにあたり、開元十八年（七三〇）に智昇の監督のもと、四千余巻の写経が都長安から幽府・範陽府（北京・河北地域）にもたらされたことが幸いし、後の唐武宗時代の法難を免れて遼代まで伝わり、契丹蔵の底本となつたと考えられている。⁽⁴⁷⁾この説に従えば、益州地域の写本大藏経の形態を反映している開宝蔵とは違い、版式や配列などに長安写経の風格を彷彿とさせる契丹蔵は、遼王朝の領土内に伝わっていたものではあるが、「唐代の一番正統な写経の系統」⁽⁴⁸⁾を受け継いだ大藏経であるということになる。残念ながら契丹蔵本や房山石経本の『続高僧伝』は全く伝わっていない

め、本稿では主として『随函録』の関連記述に基づいて、北方系統本『続高僧伝』の構成について推測しておきたい。

『随函録』は、五代に漢中の沙門可洪が、河中府（現在の山西省南部）を中心とする地域に伝わった大藏経を閲覽し、『開元録』に依つて「大乘と小乗の經・律・論・伝など七つの部門に分類される、総じて一七二六部、五〇四八巻、四百八十帙にのぼる入藏經典」に基づいて撰述した、十五冊からなる随函形式の音義書である。⁽⁴⁹⁾ 同書の編纂過程については高田時雄「一九九四」⁽⁵⁰⁾に詳しいが、それによれば、『随函録』は後唐の長興二年（九三二）十月七日から、河中府方山の延祚寺藏経を底本として、看経と稿本の作成にはいり、同清泰二年（九三五）十二月三日に一応の作業を終えた。その過程で諸寺の藏経を調査し附属の経音を利用する一方、先行各師の経音を入手し得れば直ちにそれらも参考として用いた。草稿の完成後、翌同清泰三年から浄書にかかり後晋の天福五年（九四〇）六月二十日に絶筆、序文（前序）をまとめた。ついで音義の完成を記念して齋会を設けるとともに、九月十五日をもって朝廷に献呈した」（一一八―一九頁）という。諸刊本大藏経の中で高麗藏にのみ『随函録』が伝わっていることもあり、同書は契丹藏を経由して高麗再雕藏本に所収されるに至つたと従前は考えられていた。しかし、高麗藏本に宋代特有の欠筆字が見られることや、高麗藏本と版心の位置まで完全に一致する『随函録』の敦煌写本の出現に拠つて、同書は十世紀中に北宋で刊刻された後に敦煌や高麗にそれぞれ伝わつたと考えられるようになった。⁽⁵¹⁾

『随函録』と契丹藏との関連性については、前者に取り上げられる諸經典の千字文帙号が、後者の覆刻である遼・金代の房山石経に見える帙号と一致していることから、契丹藏は『随函録』に拠つてるとまで考えられていた。ところが、『随函録』と遼金石経とは『光讚般若経』の巻数と帙の分け方が相違し、遼金石経と完全に一致するのは「開元入藏録」が記載する巻数と帙の分け方のみであることが判明した。⁽⁵²⁾ 遼金石経が「開元入藏録」と厳密に対応しているという事実は、契丹藏現存伝本に基づいて導き出された前述の結論と通底するものである。したがって、『随函録』と契丹藏・遼金石経とは、一箇所を除き、帙号がほぼ一致するのは、『随函録』が契丹藏に含まれていたとか、後

者の開板に際して経録としての役割を果たしたからというより、両者が底本として採用した写本大蔵経がいずれも「開元入蔵録」に準拠したものだからであろう。もちろん『光讚般若経』のような例外もあるが、しかし開宝蔵系統本や後述の江南諸蔵も、基本的には「開元入蔵録」を基準としているものの、実際には巻数・配列などを再調整している例が多数見受けられるのである。このように他系統本と比較するならば、契丹蔵だけではなく、『随函録』の底本もまた、かなり厳密に「開元入蔵録」に従っていることは明らかである。左表は、契丹蔵の現存伝本全十二巻の中、『開元録』にも収録される經典十巻⁽⁵³⁾について、諸系統大蔵経や『随函録』の千字文帙号（千字文と対応する数字も併せて括弧の中に表示した）の相違を示したものである。

【表一】

經典名	開宝蔵系統 (高麗再雕蔵・金蔵)		江南系統 (『略出』)	
	契丹蔵	『随函録』	契丹蔵	『随函録』
六十巻本『大方広仏華嚴経』卷四十七	問(一〇七)	道(一〇八)	垂(一〇九)	垂(一〇九)
八十巻本『大方広仏華嚴経』卷二十四	平(一一一)	章(一一二)	愛(一一三)	愛(一一三)
八十巻本『大方広仏華嚴経』卷二十六	平(一一一)	章(一一二)	愛(一一三)	愛(一一三)
八十巻本『大方広仏華嚴経』卷五十一	育(一一四)	黎(一一五)	首(一一六)	首(一一六)
『妙法蓮華経』卷二	鳴(一二九)	鳳(一三〇)	在(一三一)	在(一三一)
『称讃大乘功德経』	毀(二五九)	傷(二六〇)	女(二六一)	女(二六一)
『大法炬陀羅尼経』卷十三	彼(二七九)	短(二八〇)	靡(二八一)	靡(二八一)
『大方便仏報恩経』卷一	覆(二八八)	器(二八九)	欲(二九〇)	欲(二九〇)
『中阿含経』卷三十六	興(二六二)	温(二六三)	清(二六四)	清(二六四)
『阿毘達磨発智論』卷十三	懷(一五四)	兄(一五五)	弟(一五六)	弟(一五六)

【表一】から明らかのように、『随函録』の帙号は契丹蔵のそれと完全に一致するが、江南系統および開宝蔵系統とはそれぞれ一字（一号）ずつずれていることがわかる。したがって、『随函録』に見える諸経の帙号が、開宝蔵系統および江南系統のいずれとも相違する一方で、北方系統の契丹蔵だけとは符合するという事実に基づいて、『随函録』は、契丹蔵が底本にしたものと同じ構成をもつ写本大蔵経を底本として成立したものと認められる。契丹蔵の底本は、開元十八年（七三〇）に『開元録』の撰者である智昇らが房山へ届けた四千余巻の長安写経にルーツをもつものと言われている。房山は五代十国時代（九〇七～九六〇年）の初頭には後唐（九二二～九三六年）の領土の東北隅に位置したが、紀元九三六年に後唐を滅ぼして後晋（九三六～九四六年）を立てた石敬瑭によって、房山地域を含む燕雲の十六州が契丹国に割譲されることになった。房山地域から可洪が閲蔵したとされる延祚寺が所在する山西省西南端の河中府までは、地理的には相当な距離があるものの、『随函録』の草稿作成時（九三一～九三五年）には、両地域はともに後唐の統治下に置かれていたことは確かである。この事実のみに基づいて、延祚寺大蔵経と房山に伝わったとされる写本大蔵経を結びつけることはできないが、しかし、源流が唐代長安写経に求められる写本大蔵経を受容して継承していく共通の政治的・文化的な基盤が、唐末五代頃の当該地域一帯に存在していたことは推測できよう。

更に、五代の歴史地図で確認してみると、河中府は地名の通り黄河の途中にあり、唐の都長安（現在の陝西省西安市）と後唐の都である東都（河南省洛陽市。後晋になると東京開封を都としたため、洛陽は「西京」と呼ばれるようになる）とのほぼ中間地点に位置することがわかる。このように東西の両都とは黄河やその支流によって結ばれていた河中府は、陝晋間にあつて古くから交通上・戦略上の要衝とされ、この地域には写本大蔵経が下賜や転写などの形で長安などから直接流伝してきていたとしても不思議ではない。『随函録』の著者可洪は、漢中府（現在の陝西省南端部）の出身でありながら、近くの長安ではなく、わざわざ河中府までやってきており、執筆中の十年間に他にも種々の大蔵経を参照しながら、あくまでも延祚寺蔵を底本として『随函録』を完成させている。また延祚寺の経蔵をしばしば

「龍龕」、「海蔵」や「龍蔵」と呼び、『随函録』が完成すると、その献呈を記念して延祚寺で百僧規模の齋会を設けて、極めて丁寧かつ丁寧な対応をしたのである。これらのことを考え合わせると、延祚寺蔵経にはとりわけ重要な特性や価値があったと考えるべきであろう。

もし、実際に延祚寺蔵経が唐代の長安写経の系譜に連なるものであったとすれば、これを底本として成立した『随函録』から、唐代の長安写経本『続高僧伝』の形態や構成などが読み取れることになる。『続高僧伝』の関連箇所は、『随函録』の第二十七冊後半から第二十八冊前半にわたって現れる（『高麗大蔵経』第三十五冊、五八一～六一九頁）。『随函録』の基本的な性格は音義書であり、典籍に含まれている難字・俗字について正確な発音・字形・意味を示すことが主要な内容であるが、問題となる難字等がもともとの經典の何巻目に含まれているのかを示すため、經典の分帙だけではなく、分巻などの構成も明確に示されていて、非常に有益である。特に『続高僧伝』に関しては、分帙・分科・分巻にとどまらず、各巻の収録正伝数まで記されており、『随函録』の記述を読み解けば、北方系統の刊本大蔵経本のみならず、その成立以前の、おそらくは唐代中期から五代にかけての時期における『続高僧伝』の全体的な形態や構成が、簡略ながらもほぼ明らかになるのである。それをまとめたのが、次の表である。

【表二】

分帙	分科	分卷	『続高僧伝』 一部三十卷、分為四帙	正伝数	小計
左 第一 帙 八卷	訳 経 篇	第一卷	訳経篇有四卷。第一卷有六人。	6	15
		第二卷	有四人。	4	
		第三卷	有三人。	3	
		第四卷	有二人、訳経竟。	2	
達 第二 帙 八卷	義 解 篇	第五卷	義解篇第二、伝有十一卷、僧有一百六十一人 ⁽⁵⁴⁾ 、此卷十二人。	12	161
		第六卷	義解卷二、有二十一人。	21	
		第七卷	義解卷三、有一十人。	10	
		第八卷	義解卷四、有十四人。	14	
		第九卷	義解卷第伍、有一十四人。	14	
		第十卷	義解卷六、有十七人。	17	
		第十一卷	義解卷七、有十二人。	12	
		第十二卷	義解卷八、有十五人。	15	
		第十三卷	義解卷九、有十七人。	17	
		第十四卷	義解卷十、有十四人。	14	
承 第三 帙 七卷	習 禪 篇	第十六卷	習禪篇第三、伝有七十四人 ⁽⁵⁵⁾ 。習禪卷第一、正伝二十三人、除附見。	23	74
		第十七卷	習禪卷三、有一十人。	10	
		第十八卷	習禪卷三、有十三人。	13	
		第十九卷	習禪卷四、有十四人。	14	
		第二十卷	習禪卷五、有十四人。習禪篇至此竟。	14	
明 第四 帙 七卷	明 律 篇	第廿一卷	明律篇第四、伝有兩卷、僧有廿二人。明律卷上、有十三人、除附見。	13	22
		第廿二卷	明律卷下、有九人。	9	
	護 法 篇	第廿三卷	護法篇第五、伝有兩卷、僧有十一人。護法卷上、有六人、除附見。	6	11
第廿四卷	護法卷下、有五人。	5			
明 第四 帙 七卷	感 通 篇	第廿五卷	感通篇第六、伝有兩卷、僧有七十七人。感通卷上、有三十二人、除附見。	32	77
		第廿六卷	感通卷下、有四十五人。	45	
	遺 身 篇	第廿七卷	遺身篇第七、伝有一卷、僧有一十人、除附見。	10	10
	読 誦 篇	第廿八卷	読誦篇第八、伝有一卷、僧有十一人、除附見	11	11
	興 福 篇	第廿九卷	興福篇第九、伝有一卷、僧有十二人、除附見。	12	12
声 徳 篇	第卅卷	声徳篇第十、伝有一卷、僧有十二人、除附見。	12	12	
4帙	10科	全30卷	正伝は全405人分（ほか附見）	総数	405

これに基づいて、『随函録』が底本とした写本大藏経（第二類北方系統刊本大藏経の底本と同源）所収の『続高僧伝』は三十巻本であり、千字文帙号は「左」・「達」・「承」・「明」（数字に置き換えれば第四六九から第四七二まで）の四帙にわたって収められていたと考えられる。後述するように、収録人数こそ違うものの、この分帙・分巻の構成は、先に紹介した開宝藏系統のそれと全く同じである。

（三）江南刊本大藏経系統本の『続高僧伝』について

竺沙氏によって第三類にまとめられた江南地域の諸刊本大藏経としては、福州版と通称される二種の北宋版、および北宋末から南宋初にかけて成立した湖州版のほか、南宋寧宗嘉定九年（一一二六）から元英宗至治二年（一一三二）にかけて平江府（蘇州）の磧砂延聖院で開板された磧砂藏⁵⁶、元世祖至元十四年（一二七七）から二十七年（一二九〇）にかけて杭州路南山大普寧寺で雕造された普寧藏⁵⁷などが挙げられ、そのすべてに「内」・「左」・「達」・「承」という千字文帙号が付された三十一巻本『続高僧伝』が収められている。これらの中、本稿では北宋から南宋初頭にかけて成立した福州版と湖州版のみを取り上げることとする。

「福州版」と通称される宋版大藏経には、東禪寺大藏経（崇寧藏）と開元寺大藏経（毘盧藏）の二種がある。東禪寺版は、北宋元豊三年（一〇八〇）以前から政和二年（一一一二）にかけて、福州の東禪等覺禪寺の主導により開板された中国史上初の私版大藏経である。一般には寺名にちなんで「東禪寺版」というが、崇寧二年（一一〇四）末頃には「崇寧万寿大藏」という大藏経名が救賜されているため「崇寧藏」とも呼ばれている。東禪寺版は折本装で、基本的な版式は、一版三十六行（一折六行×六折）、一行十七字である。史料には記載されていないが、開宝藏とは明らかに相違する版式等に基づいており、その底本として採用されたのは現地の福州に伝わっていた写本大藏経ではないか、と推測されている。一方、開元寺版は、北宋政和二年（一一一二）から南宋紹興二十一年（一一五一）にかけて、福州

の開元寺に設置された「開元経局」（「経司」ともいう）という組織のもとで開板された私版大蔵経である。開元寺版も折本装で、基本的な版式は、やはり一版三十六行（一折六行×六折）、一行十七字である。⁶⁰

東禪寺版と開元寺版はいずれも全体としては伝わっていないが、ただ両者の構成・形態・開板の時代と地域等が非常に近接する関係にあるため、両者の現存伝本を相互に補って一つの「宋版大蔵経」として再編成されているのが現状である。その典型的なコレクシヨンの一つは、『大正蔵』の校本として採用されたことよって「宮本」という略称で知られる宮内庁書陵部所蔵の「宋版大蔵経」である。『図書寮漢籍善本書目 附録』（宮内省図書寮、一九三〇年）の記載事項によれば、同コレクシヨンに含まれている『続高僧伝』は「内字函至承字函 字音帖四卷四帖」にわたるが、現状としては「紹興戊辰福州開元禪寺版。達字函卷十六至二十三、崇寧三年福州東禪等覺院版。卷二十四及三十各有鈔補之葉」（九十頁表）とされている。筆者が宮内庁書陵部において、閲覧可能なマイクロフィルム紙焼きを調査した結果⁶¹、書陵部所蔵の宋版『続高僧伝』テキストは、卷十六から卷二十三までが崇寧三年（一一〇四）の刊記をもつ東禪寺版の印本であるほか、卷一から卷十五、卷二十四から卷三十一はすべて紹興十八年（一一四八）の刊記をもつ開元寺版の印本であると確認できた。また、これは福州版の特徴の一つであるが、やはり随函形式の音義帖が「内」（卷一～卷七）・「左」（卷八～卷十五）・「達」（卷十六～卷二十三）・「承」（卷二十四～卷三十一）の各帙の最後に一帖ずつ付されていた。

次に、「湖州版」と通称される宋版大蔵経は、南宋靖康元年（一一二六）から紹興二年（一一三二）以後にかけて湖州（現在の浙江省）歸安県松亭郷思溪の円覚禪院で開板された（その後、淳熙年間（一一三一～一一五二年）には版木の修復・補刻が行われた）、上記の福州版に次ぐ、史上三番目の私版大蔵経である。大蔵経が雕造された地域や寺院などについて「思溪版」・「円覚蔵」とも呼ばれるが、円覚禪院が後に「法宝資福禪寺」に昇格させられたため、同蔵は「資福蔵」の名でも知られている。また、『大正蔵』の校本として採用された増上寺所蔵の「宋本」とは、すなわちこの

思溪版本である。思溪版も折本装で、初期は一版三十六行（一折六行×六折）、一行十七字の版式だったが、後には一版三十行（二折六行×五折）、一行十七字という形式が定着するようになる。筆者が実見した唯一の思溪版『統高僧伝』は、現在愛知県岩屋寺所蔵の思溪版経典群に含まれている三十一巻本テキストである。岩屋寺蔵『統高僧伝』は、一版三十行（二折六行×五折）、一行十七字の版式をとっており、分帙の方式は福州版と同様であるが、音義に関しては、福州版の随函「字音帖」形式から随巻形式に改変され、各巻ごとにその最後にまとめて付されている。

三、諸刊本大藏経系統本『統高僧伝』の相違と分類

以上、諸刊本大藏経の成立史を踏まえながら、まず開宝藏系統に属する高麗初雕藏・高麗再雕藏・趙城金藏、次に北方系統本については契丹藏と『随函録』について概観しながら、特に両者と唐代長安写経との関係に注意した。そして第三に江南系統の宋版である東禪寺版・開元寺版・思溪版に収録されている『統高僧伝』現存伝本について紹介した。本節では、上記諸系統に属する『統高僧伝』が、書物の構成や収録正伝数において、どのような異同および特徴を示しているのかについて検討する。まず、第一類開宝藏系統本、第二類北方系統本および第三類江南諸藏本のそれぞれに収録される『統高僧伝』の、特にテキストの全体構成に現れる異同を次の表にまとめた。

【表三】

諸系統本 分科	第一類・開宝蔵系統本（三十卷本） 大唐西明寺沙門釈道宣撰		第三類・江南系統本（三十一卷本） 唐釈道宣撰					
	第二類・北方系統本（三十卷本）		帙号	分 卷	分 科	帙号	分 卷	分 科
	帙号	分 卷						
訳経篇	左	卷一	訳経一	内	卷一	訳経一		
		卷二	訳経二		卷二	訳経二		
		卷三	訳経三		卷三	訳経三		
		卷四	訳経四		卷四	訳経四		
義解篇		卷五	義解一	左	卷五	義解一		
		卷六	義解二		卷六	義解二		
		卷七	義解三		卷七	義解三		
		卷八	義解四		卷八	義解四		
	卷九	義解五	卷九		義解五			
	卷十	義解六	卷十		義解六			
	卷十一	義解七	卷十一		義解七			
	卷十二	義解八	卷十二	義解八				
	卷十三	義解九	卷十三	義解九				
	卷十四	義解十	卷十四	義解十				
	卷十五	義解十一	卷十五	義解十一				
	習禪篇	承	卷十六	習禪一	達	卷十六	習禪一	
			卷十七	習禪二		卷十七	習禪二	
			卷十八	習禪三		卷十八	習禪三	
			卷十九	習禪四		卷十九	習禪四	
卷二十			習禪五	卷二十		習禪五		
卷二十一			習禪六	卷二十一		習禪六		
明律篇	明	卷二十二	明律上	承	卷二十二	明律上		
		卷二十三	明律下		卷二十三	明律下		
護法篇	明	卷二十四	護法上	承	卷二十四	護法上		
		卷二十五	護法下		卷二十五	護法下		
感通篇	明	卷二十六	感通上	承	卷二十六	感通上		
		卷二十七	感通中		卷二十七	感通中		
遺身篇	明	卷二十八	感通下	承	卷二十八	感通下		
		卷二十九	遺身		卷二十九	遺身		
読誦篇	明	卷三十	遺身	承	卷三十	遺身		
		卷三十一	読誦		卷三十一	読誦		
興福篇	明	卷三十二	興福	承	卷三十二	興福		
		卷三十三	興福		卷三十三	興福		
雑科声徳篇	明	卷三十四	雑科声徳	承	卷三十四	雑科声徳		
		卷三十五	雑科声徳		卷三十五	雑科声徳		

この【表三】に示した第一類刊本系統の諸蔵に含まれる『続高僧伝』の現存伝本は、高麗初雕蔵本・高麗再雕蔵本・趙城金蔵本の三種類であり、いずれも三十巻本で、千字文帙号「左」・「達」・「承」・「明」（数字に置き換えれば第四六九から第四七二まで）の四帙にわたって収められている。これらの諸伝本には、著者の撰号が「大唐西明寺沙門釈道宣撰」と記されている。なお、巻数・撰号などは「開元入蔵録」の記載と完全に一致している。また、第二類の北方系統本に関しては、『隨函録』を見る限りでは、著者撰号の有無は不明であるが、巻数・分帙の方法は開宝蔵系統と完全に一致している。一方、第三類江南系統諸蔵中の『続高僧伝』は「内」・「左」・「達」・「承」（第四六八から第四七一まで）の千字文帙号が付された三十一巻本で、著者の撰号は「唐釈道宣撰」と簡略に記すのみである。

更に、江南系統本には『続高僧伝』の調巻方法に、ほかの二種の系統本とは異なる、明確な変化が現れてくる。具体的には、福州版以降の宋版『続高僧伝』では、従来の三十巻本では巻十六から巻二十の五巻で構成されていた「習禅篇」に、「習禅六」という一卷（巻二十一）が加わって六巻構成となり、また従来の「感通篇」は巻二十五と巻二十六の二巻に「感通篇上」と「感通篇下」が配されていたが、新たに「感通篇中」が加わって三巻構成となり、更には分量が比較的少ない巻二十七「遺身篇」と巻二十八「読誦篇」とが一卷（巻二十九）にまとめ直されることによつて、宋版『続高僧伝』は三十一巻本になっている。史料による裏付けは得られないが、福州版以降の『続高僧伝』に実質的にまるごと二巻分の内容が増補されることになった背景として、散逸したと思われていた『後集続高僧伝』の残闕本が宋代になってから再発見されたことがあるのではないかと推測されている。⁶⁴

次に、『続高僧伝』所収の正伝に焦点をしばり、開宝蔵系統本・北方系統本・江南系統本の収録正伝数の相違について検討したい。その際、諸本間の正伝数の相違が具体的に各本のどの位置（科・帙・巻）に生じ、そしてそれらの相違がどの程度のものであり、更に相違に傾向とでも言うべきものがあるならば、どのような変化の流れが看取されるのか、すなわち増補の全体的傾向を明示しようと試みたのが次表である。

【表四】

諸系統 分科	第一類 A 初期開宝藏系統本 (三十卷)				第二類 北方系統本 (三十卷)	第一類 B 後期開宝藏系統本 (三十卷)		第三類 江南系統本 (三十一卷)					
	分帙	分卷	指要録	高麗初雕	隨函録	金藏	高麗再雕	分帙	分卷	福州版	思溪版		
訳経篇	左	卷一	6	6	6	欠	6	内	卷一	6	6		
		卷二	4	4	4	4	4		卷二	4	4		
		卷三	3	欠	3	3	3		卷三	3	3		
		卷四	2	2	2	欠	2		卷四	2	2		
	義解篇	左	卷五	12	12	12	欠		12	左	卷五	12	12
			卷六	21	21	21	21		21		卷六	21	21
			卷七	10	10	10	10		10		卷七	10	10
			卷八	14	欠	14	14		14		卷八	14	14
達		達	卷九	14	欠	14	14	14	達		卷九	14	14
			卷十	17	欠	17	17	17			卷十	17	17
			卷十一	12	欠	12	欠	12			卷十一	12	12
			卷十二	15	15	15	欠	15			卷十二	15	15
	承	承	卷十三	12	欠	17	欠	17		卷十三	17	17	
			卷十四	14	欠	14	14	14		卷十四	14	14	
			卷十五	14	欠	15	欠	15		卷十五	15	15	
			卷十六	18	18	23	23	23		卷十六	23	23	
習禪篇	承	卷十七	10	10	10	11	11	承	卷十七	11	11		
		卷十八	13	欠	13	欠	13		卷十八	13	13		
		卷十九	14	14	14	14	14		卷十九	14	14		
		卷二十	14	14	14	14	14		卷二十	14	14		
明律篇	明	卷二十一	13	欠	13	15	15	明	卷二十一	20	20		
		卷二十二	9	欠	9	9	9		卷二十二	15	15		
護法篇	明	卷二十三	6	6	6	6	6	明	卷二十三	14	14		
		卷二十四	5	5	5	5	5		卷二十四	8	8		
感通篇	明	卷二十五	33	33	32	33	33	明	卷二十五	10	10		
		卷二十六	45	45	45	45	45		卷二十六	34	34		
遺身篇	明	卷二十七	10	10	10	欠	12	明	卷二十七	39	39		
読誦篇		卷二十八	11	欠	11	欠	14		卷二十八	45	45		
興福篇		卷二十九	12	12	12	12	12		卷二十九	12	12		
雑科声徳篇		卷三十	12	12	12	12	12		卷二十九	14	14		
全10科	4帙	全30卷	395	395か	405	414か	414	4帙	全31卷	486	486		

すでに提示した【表三】においては『続高僧伝』の全体的構成が収録する刊本大藏経によって相違すること、特に開宝藏系統本と北方系統本の構成が一致するのに対し、この両系統本と江南系統本との相違は顕著であることを示し得たとするならば、上掲の【表四】は、収録正伝数を一つの指標にして見るならば、看過できない相違は、先学の設定した三系統の間にだけあるのではなく、第一類の開宝藏系統本の中にも存在しており、結局、この系統を更に前後の二期（表中では第一類Aおよび第一類Bとそれぞれ表記した）に分けざるを得ないことを示すものとなった。したがって、【表四】の如く、刊本大藏経本は、高麗初雕藏本をはじめとする初期開宝藏本（第一類A）、北方系統本（第二類）、金藏本・高麗再雕藏本を代表とする後期開宝藏本（第一類B）、福州版（東禪寺版・開元寺版）・思溪版などの宋版を代表とする江南諸藏本（第三類）という四種に分けられることになる。そこで、以下、これら四つの種類ごとにその特徴を見ていきたい。

（一）初期開宝藏本について

まず、第一類Aの初期開宝藏本についてであるが、前述のように、『続高僧伝』を収録する開宝藏初雕本は開宝四年（九七一）から太平興国八年（九八三）にかけて完成したものであるが、開宝藏の印本そのものはほとんど逸失したため、その実態は同じ第一類の系統に属する高麗藏・金藏に基づいて推測されているに過ぎないのが現状である。現存伝本のうち、もつとも開宝藏原初の形態に近いと見なされるのは京都南禅寺などが所藏する「高麗初雕藏本」と呼ばれる集成であるが、現存の「高麗初雕藏本」は、高麗顕宗治下の一〇一一年から一〇二九年にわたり開板された「初刻」と一〇八〇年以降（文宗朝末頃～宣宗朝初頭）に行われた「続刻」の両方を含んでいると考えられる。前項で述べたように、「初刻」の底本として使用されたのは九八三年までに雕造された開宝藏初雕本（すなわち、『開元録』に基づく四百八十帙・五千四十八卷）であると考えられ、一方、続刻に際して参照されたのは、宋神宗熙寧六年（一〇七三）頃まで二回にわたって増補された分も含まれた当時では最新の開宝藏だったと思われる。南禅寺所藏の

高麗初雕藏本『続高僧伝』に関して言えば、その版木の起源は初刻に遡り得ると考えられるが、その後、続刻の開板などに伴い改変が加えられたとしても、それは個別の文字などに関わる微調整程度のものでしかなかったことは、現存する諸卷（十八卷分）の現状からも明らかである。この事実に基づいて、高麗初雕藏の底本となった開宝藏初雕本所収の『続高僧伝』のテキストには、開宝・太平興國年間から熙寧年間までのおよそ百年近くの間には目立った変更はなかったということが分かってくる。このことを裏付ける中国側の資料として、前述の『指要録』が注目される。

北宋崇寧三年（一一〇四）成立の『指要録』は惟白が金華山智者禅寺の大藏経に拠って撰述した綱目書であるが、その閲藏の対象となつたのは、真宗咸平二年（九九九）頃の初回の続刻の内容も含む開宝藏本であることがすでに判明している。同書の中に見える『続高僧伝』の関連記載を南禅寺本の現存諸巻と比較すると、両者は些細な違いを除けば、ほぼ一致している。このように、十二世紀初頭まで中国に伝わっていた十世紀末以降に印行された開宝藏本の『続高僧伝』と、十一世紀末頃までの開宝藏本の姿を如実に留めた高麗初雕藏本『続高僧伝』との間には明白な相違が認められないということになれば、それは、開宝藏本『続高僧伝』は開板後の百年間には注意を引くほどの改変は加えられていなかったという先ほどの推測を支持する証拠となる。更には、南禅寺所藏本が欠く十二巻分におよぶ高麗初雕藏本『続高僧伝』の収録内容に関しても、『指要録』に基づけばおおよそその見当はつくことになる。

高麗初雕藏本の現存諸巻や『指要録』の記述に基づいて、初期の開宝藏系統本『続高僧伝』にはおよそ三九五人の正伝が収録されていたことが分かる。この人数は、三十巻本の序文に見える「三百四十人」という数字より五十五人も超過しているが、しかし同書の現存最古の形態を留めるとされる日本古写経本の正伝収録者数三三五人とはわずかに十人差に近接するものである。因みに、その十人とは、巻四の「那提」、巻六の「僧遷」、巻九の「宝海・智方・羅雲・法安」、巻十三の「道傑」・「神素」、巻十八の「僧淵」・「真慧」であるが、これらも含めた三九五人の正伝を主幹とする初期開宝藏系統本『続高僧伝』は、唐末宋初の益州に伝わっていた写本大藏経所収の『続高僧伝』の状態を伝えるものと言えよう。

このテキストが、日本古写経本の源流にあたる唐代伝本よりさほど下らない時代に成立したであろうことは、収録正伝数の近接以外にも、後述のように、両者の間にだけ確認される種々の類似点の存在によって裏付けられるのである。

(二) 北方系統本について

前節では、特に『随函録』に見える諸経の帙号が、開宝蔵系統および江南系統のいずれとも相違する一方で、北方系統の契丹蔵現存伝本等とだけは符合するという事実に基づいて、『随函録』は契丹蔵などの北方系統の刊本大藏経の底本と同じ構成をもつ写本大藏経を底本として成立したものであると推測した。更に、この推定に立脚し、また『随函録』の記述に基づいて、第二類の北方系統に属する『続高僧伝』テキストの形態や構成などについて検討した。正伝の収録状況については、伝記本文の難字・俗字・固有名詞などが『随函録』に取り上げられない限り、収録者を確定するのは無理だが、上掲の【表二】で示したように、各巻・各科の正伝収録数が明記されているため、北方系統本『続高僧伝』には四〇五人分の正伝が収録されていたことが判明する。この数字は初期開宝蔵系統本（『指要録』によれば三九五）よりも十一人増えており、増加分は巻十三に五人、巻十五に一人、巻十六に五人と分布するが、すべて「達」字帙の所収巻（巻九〜十六）に集中している。その一方で、巻二十五の収録正伝数は「三十二」となっており、北方系統以外の諸本より一人減っている。収録正伝数の増減と分布に注目すれば、北方系統本は、後半の巻十七から巻三十まで（「承・明」の二帙分）は初期開宝蔵系統本と二箇所を除けばほぼ変わらない一方で、前半部分には後期開宝蔵系統本や江南系統本と同じ傾向の増加が見られる。そこで、初期開宝蔵系統本に見あたらないが後期開宝蔵系統本や江南系統本の前半部分（いずれも「達」字帙）には含まれる正伝収録者、すなわち巻十三における「功迥」・「神照」・「法護」・「玄統」・「慧壁」の五人、巻十五の「義褒」、巻十六の「法常」・「法京」・「法懐」・「恵成」・「法忍」の五人を併せた十一人に焦点を絞り、それらの正伝の内容を『随函録』の対応箇所と突き合わせてみた。その結果、「慧壁」以外の十人の正伝は、本文中に

含まれる難字などが『随函録』で取り上げられていることから、北方系統本にも存在していたことが事実となった。もう一人の「慧璧」に関しては、音義などの確証こそ得られなかったものの、ほかの十人と同じ増広の流れに乗っていることから、北方系統本にも収録されていたと考えられるだろう。

これら十一人分の伝記も含む合計四〇五人の正伝を中心とする内容をもつ北方系統本は、その収録正伝数に着目して考えれば、初期（三九五入分）と後期（四一四入分）の開宝蔵系統本との中間に位置しているようにも見える。ただし、『随函録』の成立年代は十世紀初頭に遡るため、執筆にあたって参照されたテキストは、当然ながらそれ以前から存在していたことになる。したがって、『随函録』が底本とした『統高僧伝』が、十世紀後半に成立した開宝蔵系統本から影響を受けたり、あるいはそれを底本とする増補を経て成立したということは考えられない。更に、『随函録』の底本となった方山延祚寺蔵経は、契丹蔵の底本と同様に、唐代の長安写経の系譜を引く写本大蔵経であった可能性があるため、そこに収録された『統高僧伝』も唐代の長安写本の形態を受け継ぐものとも考えられるのである。この『統高僧伝』は、特に収録者数に着目して言えば、現存最古の成立段階に属するとされる日本古写経本だけでなく、益州伝本の形態を反映する初期開宝蔵本よりも新しい形態を表しているように思える。そこで、北方系統本の契丹蔵の底本となった写本大蔵経は智昇が七三〇年に長安から運んだ四千余巻と伝えられることを思い起こせば、北方系統本『統高僧伝』は七三〇年までに長安で成立していたテキストに最も近接するものと考えられる。

この推測が大筋で外れていなければ、日本古写経本・初期開宝蔵本・北方系統本それぞれの『統高僧伝』の起源を尋ねれば、おそらくいずれも七世紀半ば（『統高僧伝』の序文がまとめられた六四五年）から八世紀初頭（『開元録』が完成する七三〇年）までの八十五年間に成立したいずれかの写本にたどりつくはずである。『統高僧伝』の初稿は六四五年に一応の完成を見たが、その後増補が繰り返され、その都度出来上がった新たな増補本が前後して日本や益州に伝わった。そして、各地域において流布した末に日本の古写一切経や初期開宝蔵の中に収録、温存されること

で、それぞれの源流である唐代写本の形態や内容を反映するテキストが現在まで伝えられたと考えられる。日本や益州へテキストを送り出した後も、唐の長安では『続高僧伝』の増補が更に行われ、その結果として生まれたのが、後に房山や河中府などに伝わった『続高僧伝』のテキストであり、それは、七三〇年まで智昇が『開元録』を撰述するにあたって西崇福寺で実見した「三十巻七百三十紙」に上るといわれるテキストと、ほぼ変わらない規模と構成をもつものだったのであろう。更に、前節で述べたように、八〇〇年頃に成立した『貞元新定釈教目録』にも同様の記載内容で登録されていることから、『続高僧伝』は七十年前とほぼ変わらぬ形態を九世紀初めまで保持していたようである。これらの事実からすれば、『続高僧伝』のテキストは、六四五年から七三〇年までの間は増補が不断に進められていたが、『開元録』の成立によって、いわば静止状態に入ったと考えられる。この写本段階における増補が静止する、おそらく直前の形態の『続高僧伝』が祖本となつて北方系統本『続高僧伝』を生み出した、と考えられる。そして『開元録』の出現は、写本時代における同書の増補活動に終止符を打つことになつたようにも思われるのである。

(三) 後期開宝蔵本について

初期開宝蔵本より更に一層の増補が進んだ形態をもつのが、金蔵本や高麗再雕蔵本に代表される第二段階の後期開宝蔵本である。高麗初雕蔵本の内容が確認されない状況が長く続く中で、高麗再雕蔵本・金蔵本は開宝蔵の覆刻版であるというのが一般の認識となつていたため、これら二種の刊本を十世紀に刊行された開宝蔵本と同一視する傾向が普遍的に存在していた。このような認識が共有されてきたのは、次のような理由によるであろう。すなわち、高麗再雕蔵本と金蔵本の開板の時期や地域は全く異なり、相互に影響を与えた可能性はないとされるにもかかわらず、一部の相違点を度外視すれば、両者は全体としては類似している。特に福州版などの江南系統本と比較すれば、その類似性はなおさら際立つのである。そして、このような刊本相互の関係が生まれたのは高麗再雕蔵本と金蔵本は共に開宝蔵を

忠実に覆刻した刊本だからである、と考えることで一応の説明がつけられてきたのである。しかし、このような理解は『統高僧伝』の成立過程をめぐる考察を混乱させることになった。すなわち、高麗再雕蔵本と金蔵本が開宝蔵の覆刻版であるとするならば、両者に入蔵している『統高僧伝』の収録正伝数（四一四）が、やはり開宝蔵に基づいて成立した『指要録』のそれより十九も増えているという事実の説明がつかなくなるのである。更には、開宝蔵本より遅れて成立したはずの福州版本の『統高僧伝』に、高麗再雕蔵本や金蔵本よりも古い形態を留める内容が確認されていて、このような事態が生じた理由も、従来のような諸本の相互関係に対する認識に立つ限り、不明なままに終わるであろう。

以上の問題の解明は、高麗初雕蔵本『統高僧伝』の出現を俟たねばならなかった。近年に公開された南禅寺所蔵の高麗初雕蔵本『統高僧伝』の内容は従前の予想を覆すものであり、高麗初雕蔵本には高麗再雕蔵本や趙城金蔵本とは違う一面が備わっていることが判明したのである。その中には、後者（巻十三・巻十五く巻十七・巻二十一・巻二十七く巻二十八）に見える十九人分の正伝は全く確認できず、その一方では福州版で確認された「古い形態」（詳しくは後述）が保存されているのである。高麗初雕蔵本は、高麗再雕蔵本や金蔵本と同様に、開宝蔵の覆刻であるにもかかわらず、なぜこのような相違が生じたのであろうか。この問題を追究していくうちに、「開宝蔵」とひとりで呼ばれるものは、内包する經典群の構成だけではなく、収録する個々の經典の内容に至るまで、時代の推移につれて生じた必要に応じて次第に変化させていった可能性があることに初めて気づかされたのである。『統高僧伝』に関して言えば、高麗初雕蔵本にはなく、高麗再雕蔵本や金蔵本にだけ見られる共通点が存在すること、しかも高麗再雕蔵本と金蔵本はそれぞれ違う地域で別々に修正・改変されたのも事実であることを考え合わせれば、両者の底本に当たる開宝蔵本にすでに変更が加えられていたとしか考えられないのである。つまり、高麗初雕蔵本『統高僧伝』に留められているのは初期（紀元九八三年から一〇七三年頃まで）開宝蔵本の姿であるのに対し、高麗再雕蔵本・金蔵本に共通して見える内容は開宝蔵が造印の終盤を迎える大観二年（一一〇八）頃の特徴を反映するものである⁶⁶という仮説を着想するに至ったのである。

開宝蔵系統本『統高僧伝』は、初期は三九五人の正伝を中心とする内容だったが、後期（一〇七三年～一一〇八年の間）において、卷十三に五人、卷十五に一人、卷十六に五人、卷十七に一人、卷二十一に二人、卷二十七に二人、卷二十八に三人と合計十九人分の正伝が増補され、全体の収録正伝数は最終的には四一人分に達したのである。前述のように開宝蔵本『統高僧伝』の形態等には十世紀末から十一世紀末にわたって顕著な変化は認められなかったが、十二世紀初頭になると突如として十九人分の増補がなされた。その背後には、開宝蔵とは違う系統に属する伝本の存在が推測される。なぜならば、同一系統に属する資料がある時期に顕著な変容を見せるのは、回系統の伝本を引き続き底本としながらも、その時期に別系統の伝本を校本として採用した結果である可能性が最も高いと考えられるからである。開宝蔵本および高麗初雕蔵本と、高麗再雕蔵本との相違は、別系統の契丹蔵が参照された結果であることがほとんどであるのは、その典型的な事例である。

後期開宝蔵系統本に増補された十九人の正伝のうち、いずれも前半の「達」字帙に含まれる卷十三、十四および十五が収録する十一人分は、北方系統本のやはり「達」字帙の同じ巻がそれぞれ収録していて、しかもこれら十一人分の増補は刊本大蔵経が成立する以前、すなわち『統高僧伝』が写本として流布していた段階ですで行われたものであることは『随函録』に記録が存在することから明らかである。そして、後期開宝蔵の底本とは別の増補済みの写本からこれらの正伝を導入したという仮説を、上述のように立ててみた。それでは、後期開宝蔵に含まれる十九人分の増補のうち、後半の「承・明」字帙に収録されている残りの八人分の正伝は、何を参照して増補されたのであろうか。これら八人の正伝は江南系統本にも収録されていることから、ここで後期開宝蔵と江南系統の福州版本および湖州版本との関連性について考えるならば、まず成立年代をみると、後期開宝蔵本は一〇七三年から一一〇八年までの間に成立したと推測されているが、江南系統の東禪寺版本の成立は一一〇四年に遡り、湖州思溪版本は一一二六年以降、開元寺版本は一一四八年の成立であることは前述の通りである。この成立年代順を考慮すれば、思溪版本・開元寺版本から後期開宝蔵本への影響は即座に排除されるため、関連があるとすれば、後期開宝蔵本と東禪寺版本との間だけとなる。

そこで、【表四】に示した増補の数とその分布に着目すれば、後期開宝藏本に至ってから増補された十九人分のうち、前半の「達」字帙所収の十一人分は初期開宝藏本を除くすべての刊本大藏経に共通して見えるが、後半の八人分は人数と分布の両方において、後期開宝藏本と江南系統本との間にだけ確認される共通点であると思われる。成立年代のみを考えれば、後期開宝藏本（一〇七三〜一一〇八年の間）と東禪寺版本（一一〇四年の刊記あり）のいずれがもう一方に影響を与えたかは判断できない。しかし、東禪寺版本の増補は十九人分に止まらず、ほかの系統には決して見られない更に七十二人分に及ぶ増補が存在している。もし後期開宝藏本の増補が東禪寺版本を参照した結果であるとすれば、後者における合計九十一人分の増補から十九人分のみを選んで自らのテキストに取り込んだと理解しなければならぬが、その蓋然性は甚だ低いと考へる。むしろ、後期開宝藏本を増補する際に参照された校本と、東禪寺版本の底本であり、未だ七十二人分に及ぶ増補は行われていない保唐寺本（詳細は次項を参照）が、同一の系譜に連なるテキストだったことに原因を求めべきではなからうか。

（四）江南宋版の諸本について

【表四】では江南系統本として、成立年代の古い宋版すなわち福州版と思溪版の『続高僧伝』を取り上げている。福州版という表記を使用したのは、調査対象となつた宮内庁書陵部所蔵の宋版『続高僧伝』テキストが、一一〇四年の刊記をもつ東禪寺版（巻十六〜巻二十三）と、一一四八年の刊記をもつ開元寺版（巻一〜巻十五、巻二十四〜巻三十二）とを相補つて構成された合本だからである。一方、岩屋寺蔵思溪版『続高僧伝』には年代を示唆する刊記などは見当たらないが、思溪版大藏経自体は一一二六年から一一三二年頃にかけて雕造なので、『続高僧伝』の版本もその期間中に造られたと見てよからう。福州版と思溪版をはじめとする第三類の江南系統本『続高僧伝』の構成上の特徴は先に述べたが、内容に関しては、「習禪六」（巻二十一、正伝二十人分）と「感通篇中」（巻二十七、正伝三十九人分）の二巻（正伝五十九人分）の追加が最も顕著な改変である。ただし、福州版に始まる増補はほかにもあり、それは、上述二本を後期開宝藏系統本の高麗再雕藏本と比べれ

ばわかるように、福州版および思溪版をはじめとする宋版の巻数で言えば巻二十三（五人増加）、巻二十四（二人増加）、巻二十五（五人増加）、巻二十六（一人増加）にわたって合計十三人分の正伝が増補されている。これを巻二十一・巻二十七の収録分と併せれば、宋版本全体の収録正伝数は七十二人分が増えた結果、最終的には四八六八人分にも達しており、これは『続高僧伝』諸本中、最多の収録正伝数なのである。それ以降に成立した『続高僧伝』すなわち磧砂版や元版を経て、明代の南蔵（洪武・永楽）に至るまでの諸本は、いずれも思溪版本に基づきながら、その都度、字句に微調整を加えただけのものがある。更に北蔵以降の編集は、複雑な増広過程を経て均一性を失った調卷の細分化や諸卷冒頭の目録と伝記内容との不統一の解消など、従来のテキストで顕在化してきた不体裁を整えるためのものに過ぎないことは、従来指摘された通りである。⁶⁷⁾

『続高僧伝』の福州版本と思溪版本との関係については、福州版本で四八六八人分の正伝を主幹とする全体の規模がほぼ整い、思溪版本では福州版本における欠落箇所⁶⁸⁾の補完や一部の伝記内容の拡充などの整備が行われたと考えられる。つまり、思溪版本は福州版本を底本として成立したものとされる。このことは、形態・調卷・収録正伝数における共通性だけでなく、更には福州版本に始まり思溪版本にも踏襲されている刊記すなわち巻二十の尾題の直後に記された「石大唐西明寺沙門釈道宣撰 見内典録 保唐寺藏経」という刊記の存在によっても裏付けられている。伊吹敦「一九九〇」では、この刊記は、保唐寺の蔵書から見つかった『後集続高僧伝』（残闕本）の内容を『続高僧伝』に追補する際に、「増補者が、増広の妥当性を強調するために付した注記だ」（六一頁）とする。しかし、これは、明南蔵本以前の諸本ではこの刊記が巻二十一「習禪六」ではなく、巻二十「習禪五」の末尾に記されていた、という事実を見過ごしたことに起因する誤解である。

まず、福州版本と思溪版本では巻二十の最末尾に見える「石大唐西明寺沙門釈道宣撰 見内典録」という表現は、明らかに『開元録』などの経録から抜粋したものであり、『大唐内典録』以後の経録には全く収録されていない『後集続高僧伝』に関する記載とは考え難い。更に、前述したように、宋版にはじまる増補はいずれも巻二十一・巻二十三・巻二十七の後半部分に集中しており、巻二十の終わりに記された「保唐寺藏経」とは、福州版本『続高僧伝』が巻二十までに基づいた底本

に関わる記載と解釈すべきであろう。したがって、この刊記が宋版『続高僧伝』の最終巻ではなく、巻二十の末尾に一箇所だけ記されているのは決して偶然ではなく、それは、巻二十までは保唐寺藏経本を底本としてきたが、巻二十一以降は大幅な変更を加えることになるため、前後に一線を劃するという意味も込めて記されたものと考えられるのである。

重ねて言えば、福州版以降の『続高僧伝』に登場してくる「習禅六」（巻二十一）は、底本の保唐寺藏経本にはなかったと考えられる。その証拠は福州版本の巻二十の中に含まれている。そもそも、同巻の尾題には「習禅終五」という表記が存在するが、これは保唐寺藏経本の習禅篇は全五巻（巻十六～巻二十）をもつて完結することを意味しており、更に、習禅篇の全体を締めくくる評論（「訳経」・「義解」・「習禅」など十科それぞれの末尾には、「論曰」という文言に始まる道宣自身による評論が付されている）は他ならぬ巻二十の最後に取められているのである。これらの特徴は思溪版本にもそのまま温存されているが、時代が下って元版と明版になると徐々に変更されていくこととなる。例えば、「習禅終五」という四文字は元版以降では完全に消されてしまい、また巻二十の末尾にあつた刊記は、元版と明洪武南蔵ではいったん習禅篇の評論と共に巻二十一の末尾に移動されるが、北蔵以降はそれも削除されてしまうことになる。更に、福州版『続高僧伝』が思溪版本の底本となつたことを示す決定的な証拠が両者の音義釈に見出される。經典に含まれる難字の音訓や意味を解釈する「音義釈」を經典ごとにとまとめて付すのは、大蔵経では福州版から始まる伝統である。例えば、福州版の『続高僧伝』（三十一巻本）は、巻一～巻七が「内」字帙、巻八～巻十五が「左」字帙、巻十六～巻二十三が「達」字帙、巻二十四～巻三十一は「承」字帙に取められるが、各帙の最後には、その帙が収める諸巻の音義釈を集めた「字音帖」（二帖）が付されている。思溪版に至ると、各巻の音義釈を巻ごとにまとめてそれぞれの巻末に付す形式になるが、対象となる文字やそれぞれの音義釈の内容のみならず、音義部分の文字の配置（各行の始まりと終わり）を含む体裁の細部まで、福州版本と酷似しているのである。したがって、思溪版本の音義釈が福州版本のそれをそのまま踏襲しているのは明らかであり、この事実と刊記等の特徴とを併せて考えれば、福州版『続高僧伝』は思

溪版本の底本となり、更には思溪版本以降に成立したすべての江南系統諸本の基盤となった、と判断できるのである。さて、思溪版『続高僧伝』が実際に福州版本を底本として成立したのであれば、異体字の修正を含めた文字の校訂などによる変更の範囲を大きく超える、具体的には段落ごと欠落するような相違が両者の間に存在する、という現象はどう理解すべきだろうか。この問題については、次節において諸刊本系統本相互の影響関係を検証する中で考えてみたい。

四、諸刊本大蔵経系統本『続高僧伝』に見える内容の改変

これまででは、開宝蔵系統、北方系統、江南系統の『続高僧伝』諸本について、特にそれぞれの形態や収録正伝数など構成にかかわる特徴と変化に着目しながら、主に同書の増補の過程について概観してきた。ところで、『続高僧伝』テキストの変遷は、新たな伝記の増補に限られるわけではなく、既存の各正伝の内容に関わる補完・拡充などの修訂においても顕著なのである。そこで、本節では、正伝の内容における諸刊本間の異同を考察対象に、先行研究の見解を踏まえながら、実際に現存している前期および後期開宝蔵系統本と江南宋版の諸本に現れる変遷の形跡をたどっていきたい。

この問題が提起されるきっかけとなったのは、福州版『続高僧伝』の中に「高麗本よりもむしろ古い形態を残す」（伊吹敦「一九九〇」、六四頁）内容が発見されたことである。先行研究が、福州版本と高麗再雕藏本や思溪版本との間に語句ないし段落ごと出没する相違箇所があることに着目し、特に唐代から五代にかけて成立した慧琳『一切経音義』（八〇七年頃成立）や『随函録』（九四〇年成立）等の音義書に収録される『続高僧伝』の関連語句と比べるという方法によったところ、福州版本の中にはこれらの音義書に基づいたテキストに近接する内容が、一部ながら温存されていることが判明したのである。その一例として、「宮本は、高麗本に較べて、卷第三の慧浄伝に五十三字、卷第二十五の道仙伝に二百七十一字、六十一字を欠くし、卷第二十七の僧崖伝に於ても、「時依悉……尚強」の三百二十字を「遂即出家」の四字に作る等、簡略なのであるが、これらの部分、即ち、宮本になく、高麗本や宋本以降の諸本に存在する部分には、「一

切経音義』や『随函録』が音釈の対象とした言葉を見出すことができない」（伊吹敦「一九九〇」、六四頁）ことが挙げられている。更には、最近も、平安や鎌倉時代の日本古写一切経に含まれている『続高僧伝』のテキストとの比較研究によつて、上記の「道仙伝」「僧崖伝」に加え、「道英伝」（開宝蔵系統本では巻二十五所収）の内容においても、福州版本が、高麗再雕蔵本や思溪版本とは違うものの、日本古写経本とはほぼ一致したことから、福州版本には成立の古い段階に属する内容が存在することが確認されている（斉藤達也「二〇一三」）。なお、福州版本と高麗再雕蔵本との相違点については、思溪版本以降では「ほとんど完全に解消され、高麗本とほとんど変わらなくなっている。これは、勅版本との対校によつて補正されたものと考えてよからう」（伊吹敦「一九九〇」、六五頁）とされている。この指摘は、開宝蔵と江南宋版というそれぞれに違う系統に属するテキスト間の交渉を示唆するものとして、重要かつ正確な見解ではあるが、「勅版本」とは言つても、開宝蔵系統の初期本と後期本とでは「道仙伝」「僧崖伝」「道英伝」の内容において大きく違つており、「勅版本との対校によつて補正」という結論を下すためには、更に詳しい論証が必要となるであらう。

（一）開宝蔵系統の『続高僧伝』に見える古形とその改変

開宝蔵系統本の成立は前後二期に分かれており、初期本は九七一年以降、一〇七三年頃までの形態を現わすものであり、後期本は一〇七三年から一一〇八年頃までの状態を反映していることは、前述した通りである。初期本の覆刻に当たる高麗初雕蔵本には、現存諸巻と『指要録』の記述とを合せて判断すれば、もともと三九五人の正伝が収録されていたと推測できる。この数字は、『続高僧伝』の現存最古の形態を留める日本古写経本の収録者数の三八五人よりわずかに十上回り、逆に後期開宝蔵系統本の再雕本よりは十九も少ないものである。収録正伝数の多寡によつて判断するならば、初期開宝蔵本は、諸刊本大蔵経本の中では成立年代が最も早い上、その底本も古い起源をもつものであると推察される。更にこの推察は、前述のように、福州版や日本古写経本に見出された「古い形態」が初雕本の中に

確認できたことによっても裏付けられている。すなわち、初雕本における以下の三箇所の内容が特筆に値する。

まず、筆頭に挙げられるのは、先学も注目した「道仙伝」（宋版卷二十六・開宝藏系統本卷二十五所収）と「僧崖伝」（宋版卷二十九・開宝藏系統本卷二十七所収）などである。この二伝の内容をめぐる諸本間の相違のほとんどは、いわば「略本」と「広本」との違いに他ならない。そして、初期開宝藏の形態を反映する高麗初雕蔵本には「道仙伝」と「僧崖伝」は日本古写経本のような「略本」の形で収められているが、後期に推移する過程で「広本」の形に拡充されたことが高麗再雕蔵本と金蔵本の現状から看取できる。この変容が示すのは、開宝藏系統の初期本から後期本への変遷過程においては、前述した十九人分の正伝が増補されただけでなく、既存の正伝の内容も修訂され、改変されたことである。

次に挙げなければならないのは、これまでほとんど触れられなかった卷十六所収の「法聡伝」である。【附録】「法聡伝 諸本校異」で示したように、開宝藏系統の諸本と日本古写経本がいずれも法聡の略伝を収めているのに対して、福州版本をはじめとする江南系統諸本はその広本を収録しているのである。この「法聡伝」をめぐる相違は開宝藏系統諸本間には見られない。しかし開宝藏系統本と江南系統本とは収録する「法聡伝」の相違は大きく、両者の編集方針の違いは、正伝の増補数だけではなく、個々の正伝の内容にまで影響していることが確認されたという意味で、重要な一例なのである。最後は、卷六の伝記内容における欠文とその補完から垣間見えるテキストの変遷である。高麗初雕蔵本『続高僧伝』卷六の巻頭目録の一部を示すと次のようになる。

梁益州羅天宮寺積宝淵伝十七 法文 法度 法護 本闕

梁楊都治城寺積僧詢伝十八 道遂 本闕

梁楊都靈根寺積慧超伝十九 本闕

この「本闕」という注記について、「もともとはこの伝記はなかったが、後で増やされたものだ」（伊吹敦「一九九〇」七）

頁」と解釈する説があるが、これは「テキストに欠文あり」という意味で理解すべきと考える。実際に高麗初雕蔵本をみると、「宝淵伝」と「慧超伝」との間に一紙ほどの欠落があったためであろうか、これら両伝はそれぞれ尾欠、首欠となり、その中間にあつたはずの「僧詢伝」がまるごと欠落している。しかし、この欠文は、初期開宝蔵系統本や高麗初雕蔵本の段階で生じたわけではなく、おそらく開宝蔵本の底本かそれよりも早い写本の段階ですでに発生していたであろうことは、日本古写経本の同じ箇所と同様の欠落が生じていることによつて推定される。したがつて、古くから巻六には欠文があることは気づかれてはいたが、手の打ちようがなかつたため、初期開宝蔵本以来、巻頭目録の該当箇所には「本闕」という注記が施されてきたのであろう。時代が下つて後期開宝蔵本にはこれら三人の伝記がすべて補完されたことは高麗再雕蔵本や金蔵本の現状から窺えるが、ただ紛らわしいことに、巻頭目録の「本闕」という注記は手つかずに残されてしまったのである。

(二) 江南宋版系統の『続高僧伝』に見える古形とその改変

江南系統に属する福州版が保存する古い形態に関する先学の所見を本節の冒頭で紹介したが、その中で言及された巻三の「慧浄伝」における欠文も含めて、福州版本の脱落と考えられてきた箇所は、それらを生じさせた事由によつて二つの種類に分けられる。一つは、宮内庁所蔵本個々の現存状況に起因する脱落である。例えば、宮内庁所蔵本で言つと、巻二十五（開宝蔵系統本では巻二十四）、巻二十八（開宝蔵系統本では巻二十八）には、それぞれ五一文字、二〇四文字(69)に及ぶ欠文があることが、大正蔵本の脚注から読み取れる。実際に宮内庁所蔵本を確認した結果、それらは福州版本を通じて見られる脱落ではなく、宮内庁所蔵のテキストは該当箇所の一紙と一紙中の二折がそれぞれ欠紙していることによると判明した。

もう一つは、福州版本の底本に遡つて存在する欠文である。例えば、巻三の「慧浄伝」に関しては、「又与英才言聚賦得昇天行。詩曰、馭風過園苑、控鶴下瀛洲。欲採三芝秀、先従千仞遊。駕鳳吟虚管、乗槎泛浅流。頽齡一已駐、方驗大椿秋。」というエピソードが見当たらないのは、日本古写経本も含む諸伝本の中で、福州版本だけである。この

ような脱文は福州版本巻二十の「習禅篇」の評論部分にも見られて、他の諸本では「冢宰降階、展帰心於福寺」と「定寺四海徴引百司供給」という二つの語句の中間に見える四七七文字が、福州版本では脱落している。⁽¹⁾これらの内容が欠落するに至った経緯について、断定はできないものの、宮内庁所蔵本を確認した限りでは該当箇所欠陥、欠紙はなかったため、おそらくは福州版本の底本である保唐寺蔵経本にすでに生じていた欠落と考えられる。特に巻二十の四七七文字は、一紙二十八行・一行十七字（一紙四七六字程度）という写経の規格ではちようど一紙分に相当する分量であるため、保唐寺蔵経本はこの一紙をまるごと欠いていたのではなからうか。

もし実際に、福州版本巻二十の現状に見る脱文は保唐寺蔵経本の状況をそのまま反映した結果だったとすれば、その版本（宮内庁所蔵の福州版本巻二十は東禅寺版）が雕造された一一〇四年時点で初期開宝蔵本はすでに流布していたにもかかわらず、福州版本の編集者は、開宝蔵本を参照して伝記内容の欠落部分を補闕・修訂したりはしなかったことになる。このような編集方針は、前節において福州版本巻二十の末尾に付された刊記を分析することによって得た結論、すなわち同本の巻二十一以降は『後集続高僧伝』に基づき増補が行われたために底本とはかけ離れた構成をとるが、巻二十までは底本とした保唐寺蔵経本にはぼ忠実に従おうとする姿勢と通底しているように思える。更に、この編集方針を踏まえて考えれば、高麗初雕蔵本および日本古写経本と同様に、福州版本に「道仙伝」「道英伝」（巻二十六）、「僧崖伝」（巻二十九）が拡充される以前の古い形態のまま保存されているのは、初期開宝蔵本を参照したからではなく、あくまでも底本とした保唐寺本に從った結果ということになる。したがって、福州版本は、『続高僧伝』の既存内容に関しては、巻二十までの伝記だけではなく、巻二十一以降においても基本的には保唐寺本の内容を忠実に反映していると考えられるのである。

さて、前項で開宝蔵系統本に含まれる古い形態として取り上げた巻十六「法聡伝」と巻六「宝淵伝」等が、福州版本ではどうなっているのか見てみよう。まず、日本古写経本や開宝蔵系統本が収録する「法聡伝」がいれば略伝というべき規模と内容であるのに対し、福州版本に収められた「法聡伝」はすでに内容が拡充された広伝なのである。更

に、日本古写経本や初期開宝藏本に見られる卷六すなわち「宝淵伝」「僧詢伝」「慧超伝」に関わる欠文の問題は、福州版本等の江南系統本には全く発生していない。この二箇所が存在する明白な相違に基づけば、初期開宝藏系統本と福州版本の底本である保唐寺本とは、古い形態を伝える一部の内容（「道仙伝」など）においては類似性があるものの、それぞれのテキストの系譜は違っており、また両者の間に影響関係を認めることもできないのである。

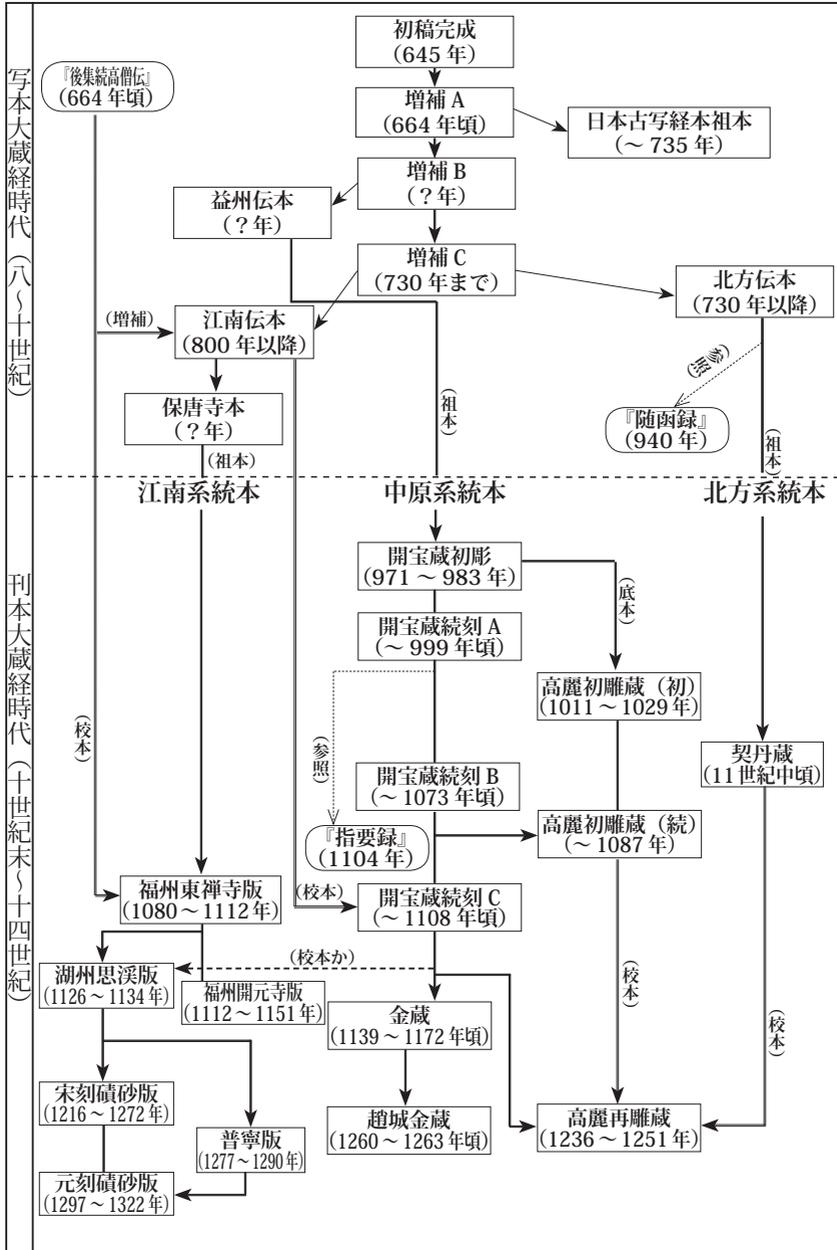
そして、後期開宝藏系統本における卷六の欠文を補完するに際して、福州版本あるいは保唐寺本を参照した可能性は年代的には否めない。しかし実際に参照したならば容易にできたはずの「法聰伝」の拡充は行われてはいないのであって、福州版本や保唐寺本そのものを校本とした可能性を肯定することはできない。特に、初期開宝藏系統本や福州版本には「道仙伝」・「僧崖伝」がまだ略伝の規模と内容で収録されているが、後期開宝藏本ではいずれも広伝に拡充されているという状況も考慮に入れると、後期開宝藏本に至ってそのような増補・修訂が実現できたのは、保唐寺本そのものではなく、ただしそれと系譜の近い伝本が参照されたからと思われる。その証拠として、後期開宝藏本と福州版本を見比べると、伝記内容の広略には差異が認められるが、全体の構成すなわち後期開宝藏本の収録伝記および配列に関しては、すべて福州版本のそれと一致していることが挙げられる。その傾向は、福州版本の卷二十一以降では『後集続高僧伝』に基づく増補が大幅に加わってくるためやや読み取りにくくなるが、卷二十までは両者の構成が完全に一致していることから明らかなように、後期開宝藏本が増補の際に基づいた校本は福州版本の底本である保唐寺本と系譜の近いものと考えられるのである。そして、高麗再雕藏本や金藏本の中に保存されている後期開宝藏本の形態は、全体的構成だけでなく、個々の伝記内容の拡充など編纂の細部に至るところまで、その校本の姿を反映しているように思われる。以上の事実とそれに基づいて立てた推測を総合するならば、後期開宝藏本にはなく、福州版本だけが収録する伝記は、いずれも『後集続高僧伝』に基づいて増補されたものであると判断できるであろう。更には、福州版本を底本として思溪版本が成立する段階で、「道仙伝」「僧崖伝」を広伝に拡充できたのは、後期開宝藏本そのものか、あるいはその

校本として採用された当時の江南地域で流布していた古写本に基づいて修訂を行ったからと考えられるのである。

結 び

筆者は道宣撰『続高僧伝』の総体的な研究に取り組みようとしている。その第一歩を踏み出すに際しては、まず、従来しておそらく将来においても『続高僧伝』研究の基盤となる各種の大藏経所収テキストの性質を文献学的に検討、確認しておく必要性を痛感するのである。そこで本稿においては、これまで、『続高僧伝』の刊本および写本テキストやそれに関連する経録・音義書・綱目書などの諸資料を具体的に検討し触れながらも、主として刊本大藏経、すなわち九七一年から九八三年にかけ史上初めて中国益州で開板された刊本漢文大藏経の開宝藏以降、次々と生み出された大藏経を考察対象としてきた。まず、開宝藏系統（第一類・中原系統）、北方系統（第二類・契丹藏）、江南系統（第三類）と大きくは三つに分けられる刊本大藏経の成立史を概観した上で、それぞれの系統に含まれる『続高僧伝』テキストについて、特に分巻・分帙等の全体的構成の異同、正伝収録数の変化、共通して収録される伝記の本文に見られる改変・拡充などに着目して同書の変遷過程を辿ることによって、その成立過程を浮き彫りにすることができたと考える。それは、全体的には漢文大藏経全体の成立史に沿っており、まずは大きく唐・五代（八〜十世紀）を中心とする写本大藏経時代と北宋以降の刊本大藏経時代の前後に分けられる。そのうち、写本大藏経時代における『続高僧伝』の状況は、これまでにも先学が唐代成立の経録と音義書、更には同書の現存最古の形を留めているとされる日本古写経本に基づいて推定してきたが、本稿の刊本大藏経本『続高僧伝』の考察の結果、中原・北方・江南という三つの系統の初期に属する四つのテキスト、すなわち初期開宝藏本・後期開宝藏本・契丹藏本・福州版本は、いずれも写本大藏経時代に成立した各種『続高僧伝』テキストにそれぞれ直接、ルーツをもつものであることが判明したのである。これらの諸系統本の相互関係を明示すべく、以下の系統図を作成してみた。

『統高僧伝』諸本の系統図



この系統図では、『統高僧伝』の諸伝本をそれが属する系統によって分類している。そのうち、中軸にあるのは、第一類とも中原系統とも呼ばれる開宝蔵系統の諸本である。開宝蔵は九七一年から九八三年にかけて初雕本が完成してから、第一回は真宗咸平二年（九九九年）まで、第二回は宋神宗熙寧六年（一〇七三）まで、第三回は宋徽宗大觀二年（一一〇八年）までとおよそ三回の続刻を経て、最終的には現在の金蔵に見られるような規模をもつようになったと考えられる。また、開宝蔵は成立後、数度にわたって東アジア周辺諸国に伝わり、特に隣国の高麗では十一世紀と十三世紀の二度にわたって覆刻され、高麗初雕蔵と高麗再雕蔵を生み出すこととなった。したがって開宝蔵そのものの伝本はほとんど伝わらなかったが、その覆刻本に当たる高麗初雕蔵・再雕蔵・金蔵に基づいて、開宝蔵の形態や内容を推測することは可能である。

『統高僧伝』に即して言えば、開宝蔵系統から生まれたテキストとしては、少なくとも初期本と後期本との二種類が存在していたと考えられる。従来、高麗再雕蔵本『統高僧伝』（一二四三年の刊記あり）と中国で造られたやはり開宝蔵の覆刻である金蔵本（成立は十二世紀に遡る）とはかなり近似していることから、開宝蔵本はおよそ二百年間にわたってほぼ初刻当時の形態を保持していたと漠然と考えられてきた。しかしながら、このような理解は、近年に高麗初雕蔵本画像が公開されたことよって大きく覆され、高麗再雕蔵本に反映されている姿よりも古い形態の『統高僧伝』がかつては開宝蔵に存在していたことが判明したのである。変容前の古形を留めている開宝蔵系統本を本稿では「初期開宝蔵系統本」と名づけるが、それが開宝蔵に存在していた年代は、高麗初雕蔵『統高僧伝』と、咸平二年の続刻分までを含む開宝蔵を参照して撰述された『指要録』（一一〇四年）から読み取れる『統高僧伝』の形態や構成がほぼ一致することに基づいて、十世紀末から十二世紀初頭までと推定される。更に種々の証拠が示しているように、この「初期開宝蔵系統本」の源流は、日本古写経本のルーツに当たる唐代写本に次いで古く、遅くとも唐末宋初には益州に伝わった唐代写本大藏経所収のテキストに遡り得るものである。

初期開宝藏系統本よりも更に増補が進んだテキストは、北方系統の大藏経に見出せる。契丹藏をはじめとする北方系統大藏経は主として八世紀前半（一伝では七三〇年）に北方地域に伝わった唐の長安写経を底本として成立したものであり、その中に含まれていた『統高僧伝』の形態や構成については、五代十国の後晋で成立した『隨函録』（九四〇年）の記述に基づけばほぼ再現が可能である。この系統の『統高僧伝』は、地域的、時代的狀況から、智昇が『開元録』を撰述する際に実見したものと最も類似した形を留めていたと推測され、また、八〇九世紀の写本大藏経時代における『統高僧伝』増補の最終段階に属するものと考えられる。残念ながらこのテキストは全く伝わっていないが、その内容を知る唯一の手がかりが高麗再雕藏本の中に残っていると考えられる。今後、「後期開宝藏系統本」に属する高麗再雕藏本『統高僧伝』と金藏本との比較研究を進め、契丹藏を校本にしたことで高麗再雕藏本に残されたかもしれない北方系統本の痕跡を発見し、その特徴を把握することは重要な研究課題の一つとなる。

開宝藏本『統高僧伝』は十世紀末から十一世紀初頭まではその初期本の形態を保持していたが、十一世紀末から十二世紀初頭に行われた最後の続刻において、突如として変容を遂げ、新たに十九人の伝記が増補されたのである。その増補の内容は、この最終回の続刻分までを含む開宝藏を覆刻した金藏と、同時期の開宝藏を底本に契丹藏や高麗初雕藏を校本として成立した高麗再雕藏の両方が収録するテキストに存在している。初期本とは明確に違っていることから、この開宝藏およびその覆刻に当たる諸藏に含まれている『統高僧伝』テキストを「後期開宝藏系統本」と本稿では名づけるが、その形成には上記系統図の左に記した江南系統の祖本と極めて近い関係にあるテキストが及ぼした影響が大きかったと考えられる。

江南系統大藏経には福州版、湖州版、杭州版など宋代から元代までに雕造された数種があるが、最も古いのは東禪寺版と開元寺版という二種の福州版大藏経である。このうち、一一〇四年の刊記をもつ東禪寺版『統高僧伝』は、福州地域に伝わっていた「保唐寺藏経」に含まれていたテキストを底本とし、『後集統高僧伝』に基づいて数十人の正伝を増補して

成立したものである。現存の東禅寺版と開元寺版とを併せて完本とする福州版『続高僧伝』と後期開宝蔵系統本を比較すれば、福州版本になってから現れた七十二人の正伝を除けば、両者の構成はほぼ一致することがわかった。つまり、初期開宝蔵系統本にはなく、後期開宝蔵系統本になってから増えた十九人の正伝はすべて福州版本の中に確認されたことになる。更に、福州版本と後期開宝蔵系統本とに共通して存在する正伝に焦点を絞って比較してみた結果、後期開宝蔵系統本の増補の際に用いられた校本と福州版本が底本とした保唐寺本とは、同一のものではないが、同じ系譜に属するものであるという結論に達したのである。この結論に大きな問題がなければ、『続高僧伝』が写本として流布していく状況を概観するならば、西南方面へは益州に、北方方面は幽州・河中へと、更には南方方面は福州などに伝わっていたことになる。そして、南方方面へは、どういふわけか『続高僧伝』だけではなく、その続集である『後集続高僧伝』も一緒に流伝し残存していたことは、福州版本には同書に基づくとと思われる七十二人分の正伝が増補されたことから判明するのである。

【注記】

※本稿は、筆者がこれから本格的に取り組もうとしている『続高僧伝』研究の一環である。今後長く続くであろう試行錯誤の、まさにほじまりに過ぎないが、小さな一歩をようやく踏み出すことが可能になったのは、先生方のご指導、同僚たちのご協力、学友たちのご支援をいただいた結果である。本稿の作成中は、国際仏教学大学院大学の落合俊典先生、楊婷婷氏、斉藤達也氏、上杉智英氏、定源氏、韓国大真大学の柳富鉉先生よりご助言をいただき、更に校正中には宝光院栗山明高師、北海道大学の林寺正俊先生、大阪大学の箕浦尚美先生、実践女子大学の牧野和夫先生より貴重なご指摘を頂戴した。最後に、本学教育研究支援課の會田友美氏をはじめとする方々より、常日頃、ご協力そして温かい励ましをいただいている。ここに記して、深く感謝の意を表したい。

(1) 『続高僧伝』巻一に、「始炬梁之初運、終唐貞觀十有九年、一百四十四載。包括岳瀆、歴訪華夷、正伝三百四十人、附見一百六十人。」(『大正蔵』第五十冊、四二五頁下段、第二十一—二十四行)とある。ここに見える「正伝三百四十人」とは高麗再雕蔵本に拠る数字だが、宋福州版以降ではいずれも「正伝三百三十一人」となっている。

(2) たとえば玄奘伝である。

(3) 前川隆司「一九六〇」『道宣の後集続高僧伝に就いて』、『龍谷史壇』第四十六号、二〇—三七頁。

(4) 興聖寺一切経本『続高僧伝』の存在と概要は、緒方香州氏が一九七八年度の印度学仏教学会大会で口頭発表したことよって知

- られるようになったが、その内容を最初に論文の形で取り上げたのは藤善真澄氏（一九七九）『統高僧伝』玄奘伝の成立——新発見の興聖寺本をめぐって——『鷹陵史学』第五号、六五〇～六五九頁）であった。現在、緒方香州氏によってまとめられた『統高僧伝』興聖寺本については、基礎資料対照表（http://ritz.hanazono.ac.jp/frame/k_room_f11_b.html）が花園大学のホームページで公開されている。その内容は、（一）『統高僧伝』資料対照表、（二）『法苑珠林』『統高僧伝』対照表、（三）興聖寺本収録人名一覧である。画像を閲覧するには、パスワードの申請が必要なのであるが、興聖寺本の「習禅篇」（http://ritz.hanazono.ac.jp/frame/k_room_f11_b.html）も制限付きで公開されており、これには、沖本克己氏による解説文（『統高僧伝』興聖寺本にこころ【解説】」（http://ritz.hanazono.ac.jp/pdf/zoku_kosoden/katsesu.pdf）が添えられている。
- (5) 伊吹敦「一九九〇『統高僧伝』の増広に関する研究」、『東洋の思想と宗教』第七号、五八～七四頁。
- (6) 伊吹敦「一九九六『統高僧伝』に見る達摩系習禅者の諸相——道宣の認識の変化が意味するもの——」、『東洋学論叢』第五十八集、一〇六～一二六頁。
- (7) 藤善真澄「二〇〇二『道宣伝の研究』、京都大学学術出版会。
- (8) SAITO Tatsuya 齊藤達也, 2012: "Features of the Kongo-ji version of the Further Biographies of Eminent Monks 統高僧伝: With a focus on the biography of Xuanzang 玄奘 in the fourth fascicle." 国際仏教学大学院大学紀要『第十六号』六九～一〇四頁。また、齊藤達也「二〇一三」『金剛寺本『統高僧伝』の特徴（二）——巻八淨影寺慧遠伝を中心に——』、平成二十五年一月十六日国際仏教学大学院大学仏教学特殊研究における発表資料。
- (9) 伊吹敦「一九九〇」六〇頁。
- (10) 『大唐内典録』巻十の末尾に、「余以従心之年、強加直筆、舒通經教、庶幾無没。幸冀後賢、摺其遠致、使法宝流被、津潤惟遠、豈不好耶。童朔四年春正月、於西明寺出之。」（『大正藏』第五十五冊、三四二頁上段、第十五～十八行）という後書きが付されている。この中に見える「童朔四年」とはすなわち麟徳元年（六六四）である。
- (11) 『大正藏』第五十五冊、三三三頁上段、第十一～二十一行。
- (12) 『大正藏』第五十五冊、六二五頁上段、第四～六行。
- (13) 『大正藏』第五十五冊、六九七頁下段、第十一～十二行。
- (14) 『大正藏』第五十五冊、七三二頁下段、第十一～十二行。
- (15) 『大正藏』第五十五冊、七四六頁上段、第十七～十九行。
- (16) この段落は、方広鎰氏の著書『仏教大藏経史（八～十世紀）』（北京：中国社会科学出版社、一九九二年）の第四章「漢文大藏経帙号考」（特に、その二七四～二九二頁）に基づいてまとめた。
- (17) 『大正藏』第五十五冊、一〇四六頁上段第七～九行。

- (18) 竺沙雅章氏は、まず一九九〇年に東方学会の第四十四回会員総会における「宋元版藏経の系譜」と題する講演の中で刊本大藏経系統の分類法について公表し、その概要は後に『東方学』第四十一号に掲載された。更に、より詳細な内容が大谷大学における講演で発表され、その原稿は一九九三年に『漢訳大藏経の歴史―写経から刊経へ―』という小冊子で出版されるに至った。これらの口頭発表を踏まえて集大成した研究成果は、後の二〇〇〇年に出版された『宋元仏教文化史研究』に見える。
- (19) 竺沙雅章「一九九三『漢訳大藏経の歴史―写経から刊経へ―』、大谷大学。
- (20) 方広錫氏が、一九九一年に出版された『仏教大藏経史（八―十世紀）』の中で、開宝蔵を中原系統、契丹蔵を北方系統、福州版等を南方系統として以来、その分類法は中国や韓国の大藏経研究者の間では広く採用されてきている。
- (21) 李富華・何梅「二〇〇三『漢文仏教大藏経研究』（北京・宗教文化出版社、二〇〇二）三八二―三八四頁。
- (22) 洪武南蔵本『続高僧伝』（二巻）の影印は、『洪武南蔵』（四川省仏教協会、一九九九年）第一六八冊―第一七〇冊に見える。
- (23) 李富華・何梅「二〇〇三、四四二―四四八頁。
- (24) 北蔵本『続高僧伝』（四十巻）の影印は、『永楽北蔵』（永楽北蔵整理委員会編、北京・線装書局）の第一四八―一四九冊に見える。
- (25) 李富華・何梅「二〇〇三、四六五頁。
- (26) 嘉興蔵版『続高僧伝』のテキストは未確認である。その内容については、大正蔵本『続高僧伝』の脚注に挙げられている文字校異によって推測することしかできない。
- (27) 開宝蔵開板後の状況を伝える史料などについて、李際寧「二〇〇二『仏経版本』（南京・江蘇古籍出版社）「下編」の「最早の雕版大藏経『開宝蔵』（五八―六三頁）」に詳しい。
- (28) 開宝蔵の統刻については、李富華・何梅「二〇〇三（六九―九一頁）」を参照。また、天台典籍の入蔵等については、拙論『摩訶止観』の往還から見た東アジア文化交流史の一齣（『国際仏教学大学院大学』、『日本古写経善本叢刊第六輯・国際仏教学大学院大学蔵摩訶止観』、近刊）を参照。
- (29) 李富華・何梅「二〇〇三、七八―八〇頁。
- (30) 開宝蔵の印本であると確定できるものの中で、中国、日本、アメリカの博物館・図書館等に所蔵されている以下の十二点のレプリカ（做真版）が、方広錫・李際寧（編）『開宝遺珍』（北京・文物出版社、二〇一〇年）に収録されている。それぞれの解題は、同書に付された「説明」に詳しい。また、李際寧「二〇〇二「下編」の『開宝蔵』存世知多少」（六四―六九頁）」も参考となる。
1. 山西省博物館所蔵「大般若波羅蜜多経卷第二百六」
 2. 中国仏教協会図文館所蔵「大般若波羅蜜多経卷第五百八十一」
 3. 中国国家図書館所蔵「大宝積経卷第一百十一」
 4. 上海図書館所蔵「大方等大集経卷第四十三」

5. 高平県文博館所蔵「妙法蓮華経卷第七」
 6. 中国国家図書館所蔵「阿惟越致遮経卷上」
 7. 高平県文博館所蔵「大雲経請雨品第六十四」
 8. 中国国家図書館所蔵「雜阿含経(卷第三十)・聖法印経綴卷」
 9. 中国国家図書館所蔵「雜阿含経(卷第三十九) 綴卷」
 10. 日本・京都南禅寺所蔵「仏本行集経卷第十九」
 11. 日本・書道博物館所蔵「十誦尼律卷第四十六」
 12. アメリカ・ハーバード大学のアーサー・M・サックラー美術館 (Arthur M. Sackler Museum) 所蔵「御製秘蔵註卷第十三」
- (31) 金蔵の開板・統刻等は、李富華・何梅「二〇〇三」(九一〜一八頁)を参照。
 - (32) 馬場久幸「二〇一〇」『高麗版大蔵経関係研究文献目録』(仏教大学宗教文化ミュージアム主催、『高麗版大蔵経発願一〇〇〇年記念国際シンポジウム』日本仏教と高麗版大蔵経)資料集、三八〜四八頁)は、二〇一〇年までに日本と韓国で公表・刊行された高麗蔵に関する論文・著書・資料およびそれらの書評等の先行研究が地域・発表年代順にリストアップされているため、非常に便利である。
 - (33) 鄭駟謨「一九九〇」『高麗仏典目録研究(ソウル亜細亜文化社)の第1篇「初雕大蔵経斗」「大蔵目録」」特に、その一(一〜一九頁)によれば、顕宗二年(一〇二一)から大蔵経雕造事業の準備等に着手し始めたが、実際の開板は二〇二〇年頃からであるとされる(二八〜一九頁)。
 - (34) 朝鮮三国時代から高麗朝までの大蔵経輸入については、鄭駟謨「一九九〇」の第1篇「初雕大蔵経斗」「大蔵目録」(特に一三〜一七頁)を参照。
 - (35) 李富華・何梅「二〇〇三」、一一八〜二一〇頁。
 - (36) 李富華・何梅「二〇〇三」、一一〇頁。
 - (37) 『寄日本国諸法師求集教蔵疏』(『大覚国師文集』巻一四、『韓国仏教全書』巻四、五五二頁上段)。
 - (38) 今まで日本南禅寺(合計五二種、一八二六巻)や韓国国内(合計二五七種)で現存が確認された初雕本の目録は、柳富鉉「二〇二二」高麗初雕大蔵経の構成斗底本(二〇二二年一月九日、韓国学中央研究院主催の国際学術会議「初雕大蔵経斗東亜細亜の大蔵経」における配布資料)を参照。また、高麗初雕大蔵経の現存諸本の影印版は、域外漢籍珍本文庫編纂出版委員会(編)『高麗大蔵経初刻本輯刊』(全八十一冊、西南師範大学出版社、二〇二二年十二月)に収録されている。
 - (39) これらの画像は、韓国高麗大蔵経研究所のウェブサイト (<https://kb.sutarakr/>) で公開されている。
 - (40) 朴相国「二〇一〇」『高麗大蔵経に対する理解』(仏教大学宗教文化ミュージアム主催、『高麗版大蔵経発願一〇〇〇年記念国際シンポジウム』日本仏教と高麗版大蔵経)資料集、二四〜三〇頁)には、「大蔵都監や分司大蔵都監は共に南海にあり、大蔵経板のすべてがそこで刻まれた」(二八頁)という見方も示されている。
 - (41) これには、「二四九六種、六五六八巻」という説もある。朴相国「二〇一〇」『高麗大蔵経に対する理解』(仏教大学宗教文化ミ

- ユーリアム主催、『高麗版大藏経発願一〇〇〇年記念国際シンポジウム』日本仏教と高麗版大藏経 資料集、二六頁。
- (42) 高麗再雕藏開板の背景、経緯、目錄、海印寺に輸送された当時の状況などについては、鄭馥謨「二九九〇」の第2篇「再雕大藏経斗」大藏目錄二(二二二～二五四頁)を参照。
- (43) 柳富鉉「二〇〇九」『高麗大藏経』の歴史と現状(『第二屆世界仏教論壇論文集』、五六～六二頁)を参照。
- (44) 影印版『高麗大藏経』には、東洋仏典研究会が一九七一年から一九七五年まで刊行した四十五冊本と、東国大学校が一九五七年から一九七六年にかけて刊行した四十八冊本(第四十八冊は「目錄・索引・解題」との二種類がある。本稿を作成するにあたって使用したのは後者の東国大学校本である。なお、両本および大正蔵の対照目錄は、馬場久幸「二〇二二」『高麗版大藏経』(東国大学校本・東洋仏典研究会本)大正新脩大藏経 五十音順対照目錄、『仏教大学仏教学部論集』第九十六号、二九～五六頁)を参照。
- (45) 契丹蔵については、李富華・何梅「二〇〇三」(二七～一六〇頁)に詳しい。
- (46) 李際寧「二〇〇二」(八八～一〇三頁)における現存印本の写真が付された解説がわかりやすい。
- (47) 李富華・何梅「二〇〇三」、一五六頁。
- (48) 竺沙雅章「一九九三」、一七頁。
- (49) 高麗蔵本『随函録』第一冊に、「依開元目錄、見入蔵大小經律論伝七目、総一七〇六部、五千四十八卷、四百八十帙、所撰諸經音義、共十五冊」(『高麗大藏経』第三四冊、六三〇頁)とある。同書は唐末五代の音義および俗字研究にとつての重要資料であり、最近の研究としては、鄭賢章『新集藏経音義随函録』研究(長沙・湖南師範大学出版社、二〇〇七年)や韓小荊『可洪音義』研究・以文字为中心(成都・巴蜀書社、二〇〇九年)などが挙げられる。
- (50) 高田時雄「一九九四」『可洪随函録』と行瑠随函音疏、『中国語史の資料と方法』、京都大学人文科学研究所、一〇九～一五六頁。
- (51) 『随函録』の伝本やその流伝をめぐる議論については高田「一九九四」(特に一一八～一三三頁に詳しい)を参照。
- (52) 竺沙雅章「一九七八」、三二〇～三二二頁。高田時雄「一九九四」、一一二～一二二頁。
- (53) その他の經典二巻は『開元録』未収の經典であるため、『随函録』では取り上げられていない。
- (54) 『随函録』では「義解篇」全体の正伝収録者数を「二百七十一人」としているが、しかし第五巻から第十五巻までの各巻の収録者数を合計すると六百六十一人になるため、ここは正しくは「二百六十一人」とすべきである。
- (55) 『随函録』では「習禪篇」全体の正伝収録者数を「八十四人」としているが、しかし第十六巻から第二十巻までの各巻の収録者数を合計すると七十四人になるため、ここは正しくは「七十四人」とすべきである。
- (56) 宋元磧砂版大藏経の詳細は、李富華・何梅「二〇〇三」(二五二～三二五頁)を参照。磧砂蔵本『続高僧伝』(三二巻)の影印は、延聖院大藏経局(編)『宋版磧砂大藏経』(新文豊出版、一九八七年)や『磧砂大藏経』(線装書局、二〇〇五年)第九十九～一〇〇冊に収録されている。

- (57) 元普寧版大藏經の詳細は、李富華・何梅「二〇〇三」(三二六―三五四頁)を参照。
- (58) 完成後も補刻(一一五八年まで)と続刻(一一七六年以降まで)が断続的に行われた。
- (59) その後、隆興二年(一一六四)から淳熙三年(一一七六)にかけて続刻が行われた。
- (60) 福州版大藏經の詳細は、李富華・何梅「二〇〇三」(二六一―二二二頁)を参照。
- (61) 筆者は二〇一三年一月十六日に宮内庁書陵部所蔵の福州版『続高僧伝』(三十一帖)について調べる機会を得た。
- (62) 思溪版大藏經の詳細は、李富華・何梅「二〇〇三」(二二三―二五一頁)を参照。また、李際寧「二〇〇二」(七八―八七頁)も簡略ながら重要である。
- (63) 愛知県南知多町山海岩屋寺には、昭和十四年(一九三九年)に「国・重要文化財」の指定を受けた仏教経典コレクシヨンが所蔵されており、その内容は、「宋版五二五七帖」、「和版一一一帖」、「写本一九五帖」で構成されている。「文化財ナビ愛知」(<http://www.pref.aichi.jp/kyoiku/bunka/bunkazainavi/yukei/shoseki/kunsitei/0618.html>)の記事事項によれば、同コレクシヨンの主体である宋版大藏經は、「大野城主佐治盛光(道西居士)が宝徳3年(一四五一)九月、岩屋寺へ寄進したものである。もとは京都桐尾高山寺または仁和寺の子院のいずれかであったものと考えられている。そのため宋版一切経のなかでも、南宋思溪版本と称されるもので、もつともよく完備し、欠本が少ない。これらの経本はすべて2帙ずつ一八八合の箱に納め、比較的完全に保存されている」と解説されている。このほか、長谷部幽蹊「二九八五」『岩屋寺蔵宋版一切経とその成立史的背景』(『愛知学院大学論叢一般教育研究』第三三卷第二号、二七―三〇四頁)などが参考できる。
- (64) 伊吹敦「一九九〇」七三頁。
- (65) 『指要録』には、『続高僧伝』各巻所収の高僧の名前が挙げられているが、高麗初雕蔵本の現存諸巻と比べると、掲載の順序に複数の相違が見られるほか、同じ巻に同名の高僧の伝記が二人分収録されている場合に、その一方しか掲載されていないといった問題がある。両者のうち、金蔵が開板された一一三九年頃とは、開宝蔵印造が終盤を迎えた大観二年(一一〇八)から三十年後にあたるので、金蔵の底本となったのは、一一〇八年頃の最後の統刻までを含んだ最終かつ最新の開宝蔵本であったと考えられる。一方、一一三六年から開板された高麗再雕蔵は、原則的には宋本(開宝蔵)を底本とし、国本(高麗初雕蔵本)や丹本(契丹蔵本)に拠って校勘修訂したものとされている。この際の宋本(開宝蔵)とは、金蔵と同様に最終版の開宝蔵であった可能性が高い。
- (66) 伊吹敦「一九九〇」七三頁。
- (67) 元版と明版(洪武南蔵・永樂北蔵・嘉興蔵)『続高僧伝』巻二では、「論曰」の直前に、「此論元遺在二十卷内／今竹堂校証合在此卷之後」と小字割注で記されている。
- (68) 『大正蔵』(第五十冊、六四〇頁注二三)によれば、高麗再雕蔵本では「化境通括、像正任持、撈航之大、未可相擬。豈法之力、惟人謂乎、弘斯在人、則顯公拋其首也。掩抑華飾、揚輝塵埃、衆皆輕而不思、可謂激通其道。及法上引衣之赴難也、則醒醉相

兼、醒則領上之累詞、醉則示虚於邪敵。雖復金櫃玉韜之秘術、未可与言。孫武吳起之奇謀、曾何足道。所以登席之始、揺動物心、異衆等山丘、鼓論同雲物。致使纓擣刃弁、載駭妖氛、定方術於面前、樹微言於即世。故有談仙者投骸於臺檻、宗虚者深剝於王庭。明詔遂頒、固無兩信。雖稱公標於定道、賢上統於義門、一時之慶、固不同年而語矣。周氏秦壤、世号武鄉、豺狼之諺、想不虛託。懷文斯寡、習勇弥隆。酌緯候之識詞、納譎誑之佞術。衛高本我之胤、張實乃彼之余。異嚮同心、唇齒相副。競列封表、曲引遊言。冒謂帝心、覆絶仁祀、時未思其禍始也。禍作萌漸、百辟之所不知、及望夷之福終也、潰發滂流、天無方改前政、呼嗟何及。僧傑、道安、名殊衛氏、風格峻逸、比景弥天。二論既陳、異見將明。而狙詐蠅巧、終墜前修。靜謐上賢、当斯頽運、奮發拒諫、守素窮巖。慨正道之遂荒、誠護法之無力也。乃解形松石、殉命西方。于時同軌道形、亦有十數、自非懷大濟於未俗、觀法滅而增長。何能捨所重於幽林、為依救而終世。誠可美矣、誠可悲夫。詳觀列代數賢、則紹隆之迹可見。藻鏡則日月同仰、清範則高山是欽。具彰本紀、其統昌矣。有隋御寓、深信釈門、兼陳李館、為收恒俗。二世續曆、同政前朝。倬像化之徽猷、襲本桓之致敬。于時縑素相望慘然、明瞻法師屈起臨對、夙未強術」とあるところが、宮内庁所蔵の福州版本では「化境夙未強術」と見えるので、「像正任持」から「屈起臨對」までの五一文字が欠落している。実際に確認してみた結果、欠落の理由は、宮内庁所蔵本では同帖の「第二十五版」中の一紙が欠けていることによると判明した。

(70) 『大正藏』(第五十冊、六七七頁注二五)も注記することではあるが、高麗再雕蔵本では「含情而無以釈、斯皆觀流而不尋源、見一而不知二。覽釈門之弘教、豈復滯斯網哉。夫造業千端、感報万緒。或始善而終惡、故先榮而後枯。或吉凶之雜起、故禍福而同萃。惟色一也、等面異而殊形。惟心一也、齊百化而無定。故無學或尽於此生、往業終於即世。有縛感由、於既往受報、未止於今時。身子悟理之通人、常懷疾惱。目連威雄之達士、終纏碎身。至聖納誘於祇園、王子被讒於清衆。儒宗絶粒於陳壤、弃湯遭變於中原。雖玄素之相或乖、而業命之縁無爽。是知文煬大宝、往福終於此世。崇建塔像、今業起於将来。交運相投、無識因之致惑」とあるところが、宮内庁所蔵の福州版本には「含情而致惑」と見えるので、「無以釈」から「無識因之」までの二〇四文字が欠落している。実際に確認してみた結果、欠落の理由は宮内庁所蔵本では同帖の「第二十五版」(一版全六折)の後半に当たる、二折分(一折六行、一行十七字)の紙が欠けていることであると判明した。

(71) 『大正藏』五九六頁注一五参照。
 再雕本『続高僧伝』では、慧浄云の該当箇所が「致令宣帝担負、傾府感於雲門、冢宰降階、展歸心於福寺、誠有凶矣。故使中原定苑、剖開綱領、惟此賢。接踵伝灯、流化靡歇。而復委辭林野、歸宴天門。斯則挾大隱之前蹤、捨無縁之高志耳。終復宅身竜岫、故是行藏有儀耶。属有菩提達摩者、神化居宗、闡導江洛、大乘壁觀、功業最高。在世学流、歸仰如市。然而誦語難窮、厲精蓋少、審其慕則遺蕩之志存焉。觀其立言、則罪福之宗兩捨。詳夫真俗双翼、空有二輪。帝網之所不拘、愛見莫之能引。靜慮籌此、故絶言乎。然而觀彼而宗、即乘之二軌也。稠懷念処、清範可崇。魔法虛宗、女盲幽隴。可崇則情事易顯、幽隴則理性難通。所以物得其筌、初同披洗。至於心用壅滯、惟繫云之儻、差難述矣。義当経遠、陶治方可会期。十住羅殺、抑当其位。福淺之識、墮愴之流、朝入禪門、夕弘其術。

相与伝説、謂各窮源。神道冥昧、孰明通塞。是知慮之所及、智之所圖、無非妄境惑心。斯是不能返照、其識浪執境緣、心靜波驚、多生定障、即謂功用、定力所知。外彰其說、逞慢惶惑。此則未閑治障、我倒常行。他力所持、宗為正業。真妄相迷、卒難通曉。若知惟心、妄境不結。返執前境、非心所行。如此宵徒、安可論理。有陳智瓊、師仰慧思、思寔深解玄微、行德難測。瓊亦頗懷親定、声聞于天。致使陳氏帝宗咸承歸戒、凶像米供、逸聽南都。然而得在開弘、失在对治。慧仰之最、世莫有加。會謁衡岳、方陳過隙。未及斷除、遂終身世。隋祖創業、偏宗定門、下詔述之、具広如伝。京邑西南置禪定寺、四海徵引、百司供給」と見えるが、一方、福州版本では「致令宣帝担負、傾府藏於雲間、冢宰降階、展歸心於福寺、定寺四海徵引、百司供給」となっている。高麗再雕本の内容と比べれば、「福寺」と「定寺」との中間にあつた四七七字ほど抜け落ちて文脈も途切れてしまつたため意味が取れにくくなつたことがわかる。

【附録】「法聡伝諸本校異」

凡例

- 一、この諸本校異は、南禅寺所藏高麗初雕蔵本『続高僧伝』卷十六所収の「法聡伝」を底本とし、その他の刊本・写本を校本として、諸本間の異同を示すものである。
- 一、諸本から採録した文字は、異体字等を含め、すべて正字体に統一して表記した。
- 一、諸本のうち、底本の高麗初雕蔵本「法聡伝」だけ本文の全文を掲載した。
- 一、諸校本の配列順は、【高麗再雕蔵本・金蔵本】【東禅寺版本】【思溪版本】【金剛寺本】【七寺本】【興聖寺本】の順とした。
- 一、【高麗再雕蔵本・金蔵本】、【東禅寺版本】、【思溪版本】の四本について、詳細は本稿の考察を参照されたい。
- 一、【金剛寺本】は、大阪府河内長野市にある真言宗天野山金剛寺所蔵の写本一切経本『続高僧伝』卷十六所収の「法聡伝」を指す。
- 一、【七寺本】は、名古屋市にある真言宗稲園山七寺所蔵の写本一切経本『続高僧伝』卷十六所収の「法聡伝」を指す。
- 一、【興聖寺本】は、京都市にある臨済宗興聖寺派本山興聖寺所蔵の写本一切経本『続高僧伝』卷十六所収の「法聡伝」を指す。
- 一、底本と諸校本との間に相異が存在する場合、底本の当該文字を太く標記し、それと対応する行の校本欄で校注を示した。校本欄で相違を示す際に使用した表記法の例を挙げれば以下のようになる。「部」都とは、底本に見える「部」という字が当校本では「都」となっていることを表わす。「一」脱とは、底本では「脱」と表記されたところが当校本には存在しないことを表わす。「神十(秀)」とは、底本では「神」とあるのみだが、当校本では「秀」字が加えられていることを表わす。

『続高僧伝』研究序説——刊本大藏經本を中心として

釋法聰姓梅南陽新野人八歲出家
卓然神正性貞潔形如玉蔬菹是甘
無求滋饜及長成立風操廉淨施
厚利相從歸給並迴造經藏三千餘
卷備窮記論有助弘贊者無不繕集
年二十五東遊嵩岳西涉武當所在
通道惟居宴默因至襄陽傘蓋山白
馬泉築室方丈以為栖心之宅入谷
兩所置蘭若舍今巡山者尚識故基
焉初梁晉安王來部襄雍承風來問
將至禪室馬騎將從無故却退王慚
而返夜感惡夢後更再往馬退如故
王乃潔齋躬盡虔敬方得進見初至
寺側但觀一谷猛火洞燃良久仰望
忽變為水經停傾仰水滅堂現以事
相詢乃知爾時入水火定也堂內所
坐繩牀兩邊各有一虎王不敢進聽
乃以手按頭著地閉其兩目召王令
前方得展禮因告境內多弊虎災請
求救援聰即入定須臾有十七大虎
來至便與受三歸戒勅勿犯暴百姓
又命弟子以布繫諸虎頸滿七日已
當來於此王至期日設齋衆諸虎
亦至便與食解布遂爾無害其日將
王臨白馬泉內有白龜就聰手中取
食謂王曰此是雄龍又臨靈泉有五
色雖亦就手食云此雌龍王與群吏
嗟賞其事大施而施有凶左右數十
人夜來劫所施之物遇虎嗥吼遮遏
其道又見大人倚立禪室傍有松樹
止至其膝執金剛杵將有守護竟夜
迴達日午方返王怪其來方以事首
遂表奏聞下勅為造禪居寺聰不往

【高麗初雕藏本】

【高麗雕藏本・金藏本】

【東禪寺版本】

【思溪版本】

【金剛寺本】

【七寺本】

【興聖寺本】

神十(卷) / (身) 十形

神十(卷) / (身) 十形

玉王 / 廿日耳

玉王 / 廿日耳

燃

燃

部

厚

道

助

馬

觀

丈

而

退

退

王

觀

間

而

退

退

乃

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

求

觀

而

而

退

退

【高麗初雕版本】
住度人安之又勅徐擴就所住處造靈泉寺周朝改為靜林隨又改為景空大唐仍於隋號初聰住禪堂每有白鹿白雀馴伏栖止行住所及慈救為先因見屠者驅猪百餘頭聰二告曰解脫首楞嚴猪遂繩解散去諸屠大恐將事加手並佗然不動便歸過悔罪因斷殺業又於漢水漁人牽網如前三告引網不得方復歸心安網而返又荊州苦旱長沙寺遺僧空聰所謂雨使遠大降陂池皆滿高祖遣廬陵王迎出都有事不遂及湘東王作牧荆峽於江陵造天宮寺迎以處之遂終此寺即梁太清年也其寺見有碑記廣敘微異景空寺猶有禪堂存焉

【高麗再雕本・金剛本】

【東禪寺版本】

【思溪版本】

【金剛寺本】

【七寺本】

【興聖寺本】

因見 忽過	因見 忽過	因見 忽過	[先]	[先]	為先 為為
網十(所)	網十(所)	[先]	[先]	大怒 大如	大怒 大如
[迎出...存焉] 重請下都確乎不許後至廬山驛驛威士因從受戒勸語還臺聰志存虛靜潛沂西上道隱前部神仙(仙 山【思溪版本】)湘東王承聞聽駕山門帥師裏之禮頓請下都因辭不許乃遣親故陳曼必令語得如不允者亦足相見以事請聰不允意暫計所期又至香溪江陵令江祿至山為起重閣三開湘東王以太清二年高祖崩捨宮造天宮寺邀延永住不守本志又之故里統御梁有扇清規禪講相參無虧畧漏所獲檀捨通藏經凡所至處靈瑞難述初太密劉之天具以聞高祖遂每西禮并送供養武陵上蜀從受歸戒巴峽守晉湖上湘東王栢木為殿殿及感放光旬日不歇王於傍造浮屠僧房講堂并王服玩作護盤立為寶光寺請聰居之王述般若義每明日將豎義殿則夜放光明照數里不假燈燭聰者以般若大慧智光顯燭所致及宣帝未臨亦同前敬聰每入道場必洒酒翹仰普賢授記天花異香音樂異發不可議也以梁大定五年九月無疾而化端坐如生形柔頂暖手屈一指異香不散年九十二矣其靈泉岡改為靜林簡改為景空大唐因而不改即地猶有所坐禪堂存焉(東禪寺版本)	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]
[先]	[先]	[先]	[先]	[先]	[先]

【付記】本稿は、その調査に関して岩屋寺様と宮内庁書陵部および国際仏教学大学院大学日本古写経研究所御当局より格別なご高配を賜った。ここに記して、関係各位に深謝申しあげる。